



草の指環

第4号



伊豆の地から

いい女といい男たちの ~ あたらしい風 ~

特集

かつて、三島の街に太宰がいた

めっせーじ

片山 美江

「箸の重くなる時がくるとは思わなかったよ」老人がおし潰した様な声で呟いた。

気丈な老人の本音を真正面から投げつけられ、返す言葉もなかった。彼は頑固一徹であったが機械ものにもあかるく、仕事上手で通っていた。長男とはどういう訳か折り合いが悪く、長男夫婦は町外で立派に家を構えていたが、滅多に訪れる事もなかった。退職後の次男の掃十郎を楽しみにしていた老夫婦も次男の事故死をきっかけに目に見えて背中が丸くなり老妻は胃の手術後間もなく死亡した。

「金はうんとあるんだろう」と云う近所の噂話をよそに、身をきるような二月、持病の神経病の治療に毎日のようにバス停にすわりこみバスを待った。老人の若い時の端整さも痩せて、却って骨々しくなり、孤独に耐える姿は訪れる毎に殺気がいや増していく様に感じられた。

まじめに一生懸命働いてきた一人の老人の姿である。人はなぜ結婚し、子供を生み育ててきたのであろうか。あたり前の事ももう一度、問い直してみたい。

新しい脳の皮質の細胞が25才前後から落ち初め、80才頃になれば大半の人の脳は古い皮質細胞しか残らない計算になる。ちょうど生後3歳児の子供に返る事になる。子供に大金や宝石を与えても喜びはしない。なによりも母親の暖かい懐があればそれで心は安定する。ちょうど老後の幸せもそれに似ているような気がする。

若い時は自由に人に束縛されないでエネルギーを発散する事もいい。二度ともどらない人生だから。でも、霞み眼の気配が感じられる40才になったら、社長さんも、校長も、保健婦だって、共感をわかちあえる身近かな家族を大切にしていける努力、自己学習が大切だとつくづく思う。

(中伊豆町保健婦)

(座談会)

かつて三島の街に太宰がいた

そして、三島には文学を育む力があつた。

昭和—平成—形は変わっても歴史はここかしこに息づかいを残している。

今回、三島、伊豆の風を吸って太宰が生きて自身を顕した跡を辿ってみました。太宰に魅せられ、太宰研究家である中尾先生お勧めの『満願』は、三島で転機をつかみとった太宰の心いきと新しい魅力を私たちにを見せてくれました。青春時代に出会った太宰とはまた別の彼にめぐり会えたような気がしています。

中尾 勇(なかお・いさむ)

昭和五年生まれ

経歴 静岡県教育委員会東部教育事務所

指導主事 足柄小学校長・県立中

央図書館普及係長 などを歴任

現在 三島市立錦田小学校校長

著作 「作家のエネルギー」「坂っ子」

「ふるさとの若山牧水—青春と愛の歌」など



錦田小学校長室にて

『満願』のあらすじ

伊豆の三島で二夏を過ごし「ロマネスク」という小説を書いていた太宰は、或る夜、酔いながら自転車に乗りまちを走って怪我をした。

大きくふとり、西郷隆盛に似た医者もたいへん酔っていた。その夜から二人は仲良くなり、毎朝散歩の途中に立ち寄って、新聞を読ませてもらうようになった。

きまって、その時刻に菓をとりにくる若い女人があった。清潔な感じの人でときたまお医者が玄関までその人を見送り、「奥さま、もうすこしのご辛抱ですよ」と大声で叱咤することがある。

小学校の先生の奥さんでその先生は三年まえに肺をわるくし、お医者是一所懸命に若い奥さんにいまがだいじのところと固く禁じた。

八月の終り、お医者の方で新聞をよんでいた太宰はうつくしいものを見た。

あの奥さんがうれしそうにさっさと飛ぶように歩きながら白いパラソルをくるくるっとまわしているのだ。

「けさおゆるしがでたのよ」とお医者の方の奥さんがささやく。三年と一口にいてもなあ——太宰は胸がいっぱいになった。

昭和十三年 発表

中尾 「満願」はどうでしたか？

平井 くやしい程の名人芸ですね。

たった三ページですごく完成されている。読後の余韻も……。

山口 私は、あの時代背景を考えると、軍部の圧力で人間の人權やあらゆる欲求を抑えつけられていた人々の気持ちを代弁したのかと思っただけですが

「いいですよ」といわれてパラソルをくるくる回して！というところは、解放された嬉しきみたいなのをその奥さんに重ねているんじゃないかと。大宰は抑圧された人々がパラソルをくるくるまわして人間らしく生きられる時代を夢みていたのじゃないでしょうか。

中尾 いや、その当時はまだそんなでもありませんでしたよ。自由のムードもありましたし、大正の退廃的なものもひきずってましたしね。

昭和6年に満州事変が起こりましたね。日本は王道楽土、五族協和を掲げて満州にとびこんでいますから、むしろ大正戦争が始まって

からの方が苦しかったですね。昭和十八年頃になると、今まであった物が生活の中からどんどん失くなっていくんですから、こりゃあ泣きたい程苦しいですよ。

太宰は、東大生の時にいろいろ事件がありましてね。例えば、実家が青森の有数の金持ちでしょ、弘前時代も彼は芸者遊びをしているように、金の自由が良かったです。そんな彼の回りに、共産党の連中が集まるんです。弘前時代もそれに関わる事件があって、彼の先輩は放校されたりしますが、彼は免れて東大に入ります。その先輩にも共産党のチーフをやっているのがいて、彼の所にカンプを求めてくるんです。彼は金を出しますよ。そういう時代に坂部武郎と知り会ってますね。この方には、私も三回ほど逢ってますが、静浦の坂部酒店の人です。東京に「キタサン」という洋服屋さんがあって、この人は太宰のお金の管理なんかをしていたのですが、この近所にすんでいたんです。

山口 そういう関係でしたか。

中尾 この二人は、ものすごく気が合うんですね。太宰は、道を歩いても、あそこに警察がある、派出所があると地図を書いて持ってたようです。思想的にそう強いものでないしろ、金持ちの坊ちゃん、共産党に金を出しますからね。昭和五、六年頃、大弾圧があって小林多喜二が足に数ヶ所五寸釘をさされた跡があって、胃がでちゃったりした拷問の跡を知ってますね。彼は怖かったんでしょう。

山口 そうですね。怖かったと思います。命がけでしたものね。

中尾 昭和七年に、青森署へ出頭して共産党と絶縁する、ということになる。その後には小山初代という芸者と、相続なんかを放棄して一緒になる。彼は、坂部武郎に静養したいというんですね。すると坂部は、沼津の志下へいけばいいと誘うんです。太宰は、一夏暮らしています。小山初代は断髪で、モダンな格好であらわれた！と坂部愛子さんが言ってます。

この人は坂部武郎さんの妹さんで、私も3回ぐらい会いましたけど「老ハイデルベルヒ」では、しゃきしゃきした娘さんとして書かれています。二人は、掛取りの金も皆飲んでしまおうという生活で、愛子さんはやきもきしていたようです。で太宰をじゃま者にしたりするんですね。

—その当時の生活を書いたのが「思い出の記」なんです。

太宰の創作力は、 切りとる感性

平井 私は太宰の作品の中では、「人間失格」が好きなんです。「満願」のような明るい作品はなんか無理をしているような感じをうけてしまってます。太宰というと、傷口に塩をぬりこむように目をそらさず、自分の内面を見つめる。というかそういう所に魅力を感じるのですが。中尾 そういうこともあるでしょうね。あの時代は東の間ですね。彼の

場合はあの一編ですよ。

小野 私、どうにもよくわからないんですが、三島で「ロマネスク」を書いてますね。これは遺書のもりで書いたと後の方にあたりするんですが同じ時代に明るいものと、こういうものを……。

中尾 彼の場合は、内にあったんでしょね。遺書のもりで書いたというのはね。例えば、昭和五年に小山初代は東京に出きます。その時も分家だとかいろいろもめるんです。昭和五年頃から出版活動も始めたりして、四月に東大に入りますが、いかないんですよ。その後十九才の鎌倉の女性と心中しますね。女は死にます。彼は自殺幫助罪ですよ。七年には共産党事件もあって、いろんなことが重なるんです。彼の側からではなく、壇一雄の「小説太宰治」なんかには、昭和十一年の二月には、追いつめられるんです。長兄と約束した東大の卒業もできない。一日も行ってないんだからできませんよね。当時の都新聞の入社試験にも失敗する。

三月に、実家から送られた九十円持って遊び呆けて、鎌倉で首吊り自殺するんです。死にきれなくて首の回りに月の輪熊のような跡をつけて東京へもどってくるんです。壇一雄が熱海などへ捜しに行行って帰ってきた直後、彼も帰ってくるんですが、なぜか二人で風呂に入って、そこで太宰は「死にきれなかったよ」といってます。その間に昭和九年があって、三島にきて「ロマネスク」を書いてます。山口 どん底からはいだしてユーモアを造っている気がして、痛々しいですね。笑えません。きれいなのは表面だけですものね。

小野 本当よね。笑えないわよね。中尾 その中で東京脱出を考えて。井伏鱒二なんかと御坂峠へ行ってあの有名な「富嶽百景」なんかを書くんですね。あれもバスの中でのなりのおばあさんが、「あ、月見草が」と言った一言から創られているんですから。一同 すごい創作力ですよ。磯部 あの私は太宰の作品はあまり読んでなくて、価値とかはよくわからないんですが、夫はほとんど読んだようで、暗い暗いと言ってますね。今回初めて「満願」は読んでみましたが、本来伸びやかな人だったんじゃないかな、と思ったんです。いろんな身構えるものが一時的にしろなくなった時に、彼のもってるものができたんじゃないかなって。太宰の作品に無彩色のイメージが強かったんですけど、作品中のパラソルさして白い簡単な袖口からなんていう部分は色っぽさなんかも感じて、見直したというか、本質はこういう明るさを持っているんじゃないかって思えたんですけど。

幼児期の育ち方っていうのは決定的なものがありますよね。この時期に裕福に育てられた子供というのは、ある程度のものであってもくじけませんよ。

石田 太宰も長男とかに生まれてたら違ふと思います。名家に生まれてもそれなりの評価を受けてないんですね。プライドが高いから、もっと寛大に自分を認めてもらえたら、もっと伸びやかなところがでたんじゃなにかしら。

山口 あの人の不幸っていうか、ま、それが創作の原動力になったんだけれど、自分がいる場所がないということをどこにいても感じたのね。

石田 選ばれてあることの恍惚と不安



山口 そう、それよね。私は、あの人の家・斜陽館へ行って泊まったことがあるんだけど、すごい立派なお屋敷なのよね。でもその回りは、皆貧しい軒先が低く連なっているの。びっくりにしたのは、階段が二つあって、一つは広くゆったり堂々としていて、もう一つは裏の方に狭く急な

階段があるんだけど、これはきっと
使用人用よね、そういうことから
金持ちの息子というのが罪の意識に
なっちゃうんですね。でも共産党に
かかわっても、自分は別格に思われ
て居る場所がない。そこから悲劇が
始まってるみたいですね。

中尾 そういうところはあるかもし
れませんが。相馬正一さんという大
学の教授をしてる方を知ってますが
それに近いことを言ってます。太宰
の研究の第一人者ともいべき人で
すが、「満願」に限って言えば、結
婚も決まって気持ちの切り換えがあっ
た時の作品なんです。中では小学校
の先生という設定ですが、実は、三
島の作家志望の池さんという人がモ
デルだったようですね。その相馬さ
んという人は太宰のこととなるとす
ぐ飛んでくるんです。大学の先生っ
て暇なのかなあ(笑い)なんて思う程
にすごいですね。それにかける一念
というのは。で何日か二人であちこ
ち三島を確めて歩きました。例えば
太宰は三島時代、どこに住んでいた

かなんていうのを確認する時は、ヒ
ヤヒヤものですよ。

骨の髄まで 「ロマネスク」

平井 先生は、実証的に太宰の作品
を調べてらっしゃいますが、どうし
てそこまでひかれるのでしょうか。

中尾 三島にいたからですよ。僕は
太宰が三島にいなかったらこんな
夢中にはならなかったでしょう。太
宰の作品「ロマネスク」「思い出の
記」「満願」「老ハイデルベルヒ」
自分の住んでいる三島を描いてくれ
た直感力なんかにはヒリヒリします
よ。自分のわかる範囲の中で、です
けど、いろいろ確かめながら思うん
ですが、「ロマネスク」なんか骨
の髄までわかる。若い時理想を追い
ながらも途中でくじけていく様…三
島に生活していてよくわかる、三島
のけだるい有様。常に進歩的なこと
を言いながらなかなかよ者は受け

付けない。そういう我身の痛さ、辛
さがこの時の作品にはよくあらわれ
てますよね。後年、彼は妻の美知子
さんやお母さんを連れて三島におり
る。三島は何も変わってない。三島
の人間で何と怠惰な人間だろうとい
う感想を書いているんです。僕にとっ
て強烈なイメージですよ。だからと
ことんつつこんでしまうのかな。

平井 いろいろ三島での部分を追い
かけられているんですね。私達なん
かは、そんなに太宰が三島に関わっ
ていたの知らなくて今日改めて思
いを新たにすることもたくさんあっ
たんですが、先生が「草の指環」の
読者や私達に「満願」のこういうと
ころを、とすすめられるところを教
えて下さい。

中尾 最後の「三年」といってもなあ。
「というところでですね。その裏には、
自分は一度の失敗をも許せなかった。
これは小山初代とのことなんですが、
彼が一年いない間に彼女は一度まち
がいを犯しますね。それで別れるこ
とになるんです。そういういろんな

思いをこめたと推察しても、その最
後に人間讃歌みたいな思いがパァッ
と拡がりますよね。あの一瞬が輝く
ようにも見えます。そこがいい
ですね。で、あの作品で、三島を完
壁に浮き彫りにしてくれたことが嬉
しい。「ロマネスク」もそうであるよ
うに、三島はいろんなところにて
くる。太宰が生活した一番の所です。
小野 重いですね。三島の役割って…。
中尾 重いです。坂部さんなんかも、
この人は数奇な運命ですよ。酒屋を
開いたのは太宰のためのような感じ
ですからね。昭和八年に開いて、九
年に太宰がくる。十年にはもう店を
閉めますよ。



一同 まるで太宰の為に開いたようですね。

中尾 坂部さんは、太宰に何としても小説を書いてもらいたかったようですね。

石田 太宰の作品の魅力はどういうところでしょう。

中尾 僕などは一緒に昭和という時代を生きて、ピリピリするものがありますよ。太宰の内にある問題って、人間の本質みたいなものがあるんじゃないですかね。もっともととふるさとの太宰を書きたいですね。

石田 当時からですか、こう若くして読んだ時のことですか。

中尾 その時はわからなかったです。只、若さゆえの苦悩というかつまるるところ時間をどう食っていくか、という身悶えするような時期に太宰を知ってのめりこんで、あの初期の弘前にいた頃の作品なんか怖かったですね。

山口 太宰の作品を読んでいて思うのは、弱者に対する優しさってすごいですよ、行間に浸みでてますよね。

小野 当時はあんなものと言われたこともありましたけど、今は必読図書になってるんですね。

中尾 僕は、自分の若い時に読んで苦しみもがいた思いがあります。自分の息子が太宰なんて言った時は、

思わずかきましたよ。こんな思いは自分ひとりりでたくさんで、息子には平凡な人生を歩いてもらいたいと思いますからね。キリキリしました。

石田 深読みすると、太宰は弱々しくなんかいいですよ。よく女々しいとか暗いとかいわれていますが、

文はきれいだし、計算されてるし……

中尾 そうですね。

石田 ものすごく強いですよね。

中尾 そうそう、強いですよ。

それぞれの太宰

小野 「桜桃」とか、「斜陽」とか余りにも有名だけれど、どう？その他たくさんある作品の中では「桜桃」

はいい？

石田 「桜桃」はいいよ。とてもいい。センテンスが短くて一行一行の文体がとてもきれいだ。あれは、俳句をやっていたということからでしょうか。

中尾 そうでしょうね。俳句をやったり小唄をやったり、端唄をやったりしていますからね。

小野 ユニークだと思って、「トカトントン」とかあの感性がおもしろいと思う。私は「ダス、ゲマイネ」が一番好きよ。

石田 私は、「駆け込み訴え」、最近これが好きになりました。ユダがね、思うことを綿々と始めから終りまで一人で訴え続けるでしょう。そして言い尽くしている。

平井 それぞれいろんな好きな作品があって一人一人の感性が解るネ。それぞれどんなところに共感しているとか。山口さんは何が好き？

山口 私は、そうね。「人間失格」はすごいと思う。白鳥の歌。

平井 私なんか太宰は「人間失格」

を書くために生まれてきたという感じがする。

小野 先生は、先ほどの三島での三つの作品と他にどんなものがお好きですか。

中尾 そうですね。「グットバイ」が好きですね。あれ読むとすぐに田中英光さんの「オリンポスの果実」を思っ、ジワーっとなることありますから。

磯部 太宰が死ぬ時その場所には熱海とか三島を選ぶだろうと壇一雄が言いますね。それは、風土とか自然に親しんでいたということからでしょうか。

中尾 そうじゃないんですよね。壇一雄は、ズケツと言ってますよ。あいつは臆病だから、自分が知っている所しか行かないはずだと。

磯部 それで、ここか？三島が、ですか。

中尾 自分の知っている所しか行かない、というそれで見通しをつけるんですね。

磯部 何と言うか、気が弱い？

中尾 そうは言うけど、太宰は、強い人だと思うよ。坂口安吾でしょ。

壇一雄でしょう。当時の放埒人生を極めた人達で、しかも日本の毒舌界の代表だよ。それらと堂々と生活しているんだもの。そうでしょ。

小野 そうですね。今日のお話でそう思いましたね。傷つききりぎりやっているけど、仲々、どうしてという感じがしました。

中尾 そうとうなキャパシティがありますよ。

戦後から現代へ

平井 戦後すぐに太宰が執筆活動をするでしょ。戦争中も、書いてはいたけど。あの当時は小説が時代を創ったというか、太宰が次に出すのは、何だろうか?とか、『世界』にこう書いているけどどう思うかとか、若者がすごく真剣に討論しているでしょ。中尾 当時は、みんな活字に飢えて

いたからね。

平井 それを思うと現代は、小説というの、私達が論じたり時代を創っていくという役割は希薄になっている。それは、どういうことかなあーと思います。

中尾 あの当時は、活字に飢えていたから。戦争で抑えられてきていたものが一気にワーストとでてきたんですね。

平井 時代的なものかなとも思うし、作家のスケールかなとも思うけれど、若者が興奮して論じているというのは今からみたら隔世的というか。

磯部 それは、ある意味で生活じゃないからと思うんですね。これを食べなきゃ生きていけないと思えば、たとえ何でも口にする、けれども、満たされている時には自分の安心出来る部分でしか吸収しないわけでしょう。

中尾 そういうこともあるうと思えますよ。ハッキリ言ってしまうと、文学なんて人間には不必要なもので、むしろないほうがいい。昭和二十年代はそうでした。戦争中も、そうい

う軟弱なものはいらない。といわれてましたからね。当時も、ま、現代もそうでしょうか。腹が減っても本を読みたい人間もいれば、全く関係ない人間もいる。そういう文学に人生をかけていく、というのは、やっぱり厳しいでしょうね。

石田 当時太宰の生活は裕福でしたか。

小野 豊かすぎる位だったのでは?

石田 でも作品みるとそうは見えないですよ。

磯部 豊かな人間は金が身につかない。どんづまりの生活観なんか見えませんよ。

中尾 彼の三鷹の家はすごく小さな家ですね。晩年になってからです。ある程度物がそろって豊かになったのは、「火宅の人」読んだってちりちりしてるじゃないですか。終わりの終わりまで間借りしたり、女の人待たせて金借りたり、ひりつくような生活していますよ。

石田 太宰は、芥川賞をほしかったようですが取れませんでした。

小野 どうしてなんでしょう。

石田 候補には上ったんだけど結局石川達三の「蒼氓」に決った。

中尾 その当時、太宰の生活は乱れてましたから、そういう事情もあったのでしょうが。志賀直哉が後年自分に送られてきた太宰の初期の作品

を読みました。これはすごい小説だ、と思うんですね。その時には、彼はもう死んでしまっていたんです。

先程も言いましたが、初期の作品というのは、人間の思春期の生き方の稚拙さが描かれてそれは猛烈なほどでした。自分も苦しい程の思いを重ねて読みましたからね。

平井 太宰が青春文学といわれ、一度はくぐる青春の門ともいうべき文学といわれる故がそこにあるわけですね。その重要な位置を占めた三島、それを包む伊豆に住んで、一つ、課題を目の前に積まれた気がします。何か、もう一度触れたくなってきた。今日は、本当にありがとうございました。一同 ありがとうございます。

『フジヤマの飛び魚』大いに語る

昭和3年9月16日 浜松生まれ
 昭和22年 全日本水上選手権
 400m自由型世界記録
 24年 ロサンゼルス大会
 1500m初め4つの自由
 型で世界新記録
 以後 33回の世界記録を樹立
 現在 日本水泳連名会長
 ☆戦後の荒廃した日本に大なる
 希望をもたらした。



古橋廣之進ご夫妻

‘88, 10/23’ 大仁ホテルにて

—子供の頃の事を聞かせて下さい。

古橋 私は九人兄弟の一番上で、小学校時代はずっと健康優良児でした。食事の時間になると、障子の穴から覗いていてどの席に坐れば一番たくさん食べられるか見ておいて、真っ先に坐りました。積極的で、よく食べ、よく動く——そんな少年時代でした。戦中戦後の食糧難に、さつまいもとインゲン豆、とうもろこしだけで一日二万メートル、七〜八時間も泳げたのは、ふり返ると子供の時につけた体力が基本になっていると思います。

—水泳を始められたきっかけは？

古橋 小学校四年生の時、浜名湖を利用してプールができたんですよ。といっても、木製で日よけによろずを使って、板で囲っただけの簡単なものでしたが。両親が感激しましてねえ、それまではすもうとりになろうと思いましたが、これがきっかけで水泳を覚え、六年生の時に静岡市で自由型百メートル、二百メートルに学童日本記録を出し、「静岡新聞」で、「人間魚雷」と書かれましたよ。

—戦争中は、泳ぐことができたのですか。

古橋 浜松二中の四年生の時に勤労動員、その後すぐ終戦でしたが、ずっと泳げなかったですね。昭和二十一年の五月でしたか、日大の中学で水泳部員を募集していて、食物がない時に三島の友達がさつまいも二本持ってきてくれて、そのお蔭でプールに通いました。この年に母が亡くなりまし

てね。働こうと思ったのですが、父が、『大学へ行け』と、それで日大に入りました。

—戦後はどうでしたか。

古橋 タイムは腕時計、コースの線は縄で仕切る(笑い)水泳パンツもなくおふくろの腰巻を縫って染めて作ったり(笑い)昭和二十二年に水泳パンツが配給されました。ロサンゼルス大会を始めとして海外あちこち行きましたが、オーストラリアでは日本の戦争の記憶が生々しく残っていて「俺の息子を返せ!!」と言われたり、食堂に入っても日本人ということで食べさせてもらえなかったり、複雑な思いをしました。

—言い知れぬ思いがありますね。ところで…お隣の素敵な奥様、共に歩いてこられた思い等を…。夫人 主人とは昭和三十三年に人のお世話で結婚しましたが、この人の暮らし方、生き方に私も共感を持ちますし、尊敬しています。何でもそうですが、好きなことに打ちこめる人っていいですね。

※ 年輪を重ねて尚若々しいお二人、和やかな中に凜としていてさわやかトークングでした。日本は青少年を育てる環境が遅れているの一言は心に残りました。

今回は、大仁町の食品衛生協会大仁支部の招きでいらしゃったところを、主催者のご好意でインタビューさせていただきますました。

冬 薔 薇

——大嶽もとさんの青春——

(聞き書き)

杉 山 早 苗

(函南町)

虹口地区に赤れんがの家を借り

共同租界地の貿易会社で働きました

三角市場とよばれた虹口マーケットには

黄浦江や揚子江の川魚、東支那海の魚

白系ロシア人のパン、ドイツ人のソーセージと

各国の食べ物が豊富にそろっていました

広大な黄土色の水面に茜の太陽が沈んでゆく

黄浦江の夕陽は

戦時下とは思えぬ平和な光景でした

カーキ色に統一された内地と異なり

絹のストッキングやフランス製の香水まで

上海ではまだ身につけることができ

二月の私の誕生日に

ダンスホールで一晩中踊りあかしたことも

今はなつかしい思い出です

やがて男の子もうまれ

私たちは租界地での自由を謳歌していました

昭和十六年、太平洋戦争がぼつ発

街は日の丸一色となりました

揚子江を渡る船上で便衣隊の狙撃にあい

同僚の貞子さんが亡くなりました

チャイナ服をリラの花のブローチで飾り

妊娠七ヶ月の体でした

中国側の抗日戦は激しくテロ事件が頻発

多くの犠牲者をうむ慌んだ街とかわりました

昭和十七年、私たちの幸福も崩れました

内地から彼の父親がやってきたのです

生木を裂かれるように

彼や子どもと引き離されました

子どもは二歳、かわいい盛りでした

「チャクラの花、ホーフア(好い花)ね」

二ヶ国語まじりの片言が今も耳に残っています

再会を約束してくれた彼の言葉だけを頼りに

私も引き揚げてきました

しかし

その後の東京大空襲で赤坂は焦土と化し

彼や子どもの生死さえ不明になりました

過去は悔いても戻らず、癒しても癒えず

二十代の心の傷は深く、未だにうずいています

彼や子どもがどこかで生きていたら

どうぞ、幸せであってほしいと念じるのみです

襦袢をしている老後など

あの頃は想像もできませんでした

今、老いさらばえて病臥する私にも

せいっぱい生きた青春の日々があったのです

昭和十四年の春

私たちは上海にのがれました

知り合って二年…恋の逃避行です

時計台のあるオフィス街には

アメリカ、フランス、イギリスの国旗がはためき

上海は欧米風の洒落れた街でした



大嶽もとさん

あなたが亡くなって六年たちました。私は今でも沈丁花の匂う頃になると、「早苗さん、沈丁花がほしいのよ。大好きだわ。持ってきてくださる？」と言ったあなたが思い出されます。

あなたからはじめて手紙をいただいたのは昭和五十四年十一月のことでした。私の青春の詩に六十一歳のあなたが共感してファンレターをくれ、私たちの文通が始まりました。

手足が萎え、涎を垂らし、口もきけず泣いて意志を訴えるだけのあなたが書いてくれた多くの手紙。上海の青春、戦後の結婚生活、配偶者との死別、天涯孤独の身で老人ホームに入居、脳溢血の後遺症のため函南町内の病院に入院。昭和の時代と共に生きてきたひとりの女性の人生がくつきりと綴られています。

華やかだった青春に比べてあなたの晩年は不安定であまりにも孤独でした。「淋しいと口に出しても仕方がないとわかっている。でも言わなくてはられない」「熱が出て口がきけなくなり辛い」と淋しさや体の不調を訴える手紙が続きました。当時、三歳を頭に幼い三人の子を抱えていた私は気になりながらも身動きできませんでした。手紙で励まし「きょうも頑張って生き抜きました」と返事がくるとホッとしたものです。

五十五年のどんよりとした冬の日、やっと病院を訪れることができました。案じていたより元気そうで、短かい会話しか交わせませんでした。人なつこい笑顔が印象的でした。ベッドの傍には便箋とペンが置かれ、書くことがひとり病床にいるあなたの生きがいであると感じました。それを心棒にして自分を支えきってほしいとねがいましたが、それは無理なようでした。病状の悪化とともにあなたはわがままになり、まわりの人にべつとりと依りかかっていきました。

五十六年の夏、死が訪れ、身よりのないあなたは無縁仏として埋葬されました。あなたの死を知らされ、私はなすすべもなく心の中で謝り続けていました。年老いてからの孤独や体の不調を汲み

とることができず、何も手をさしのべようとしなかった私。面倒くさいことから逃げてしまった狡さも私の中にありました。申し訳なさは今でも痾となって残っています。

——昭和という激動の時代。その中でもっとも暗かった戦時下に、自分を偽ることなく愛に生きたあなた。冬空のもとまっ赤に咲いた一輪の薔薇。私はそんなあなたが大好きでした。——



アネモネ

磯部 信子

第一印象 妥協はないが情がある

思いつきり 華！

この橋の手前を、その一行は左に曲がる。重たい杉の古木、連なる竹林、石垣の上に佇む家に包むようにのしかかる楠木、全てが張りついたように動かない風景の中を、一行は何の矛盾もなく歩いていく。

姉は、父母と共に知人の家に出発の挨拶に行く。社会に巣立とうとする朝のこと。私は橋の上に立って、山肌色の道を動いていく三つの背を見送る。石ころの原っぱのような河原の真中を、チョロチョロとすまなそうに流れる川の水は、妙に心もとなく、いつまでも見ていた。鉛色の空に劣らぬ閉じこもった景色だった。

十歳を幾分出た頃のことだったろうか。

「はい。〇〇でございます。」

電話の向こうの声は、いつも商売口上で変わるこ

とがない。自宅にいても、店にいても、全く同じ調子その声は、持主の生きる姿勢というか、不器用さというか、その人を物語る。

「私、信子です。」

「あ、信ちゃん！元氣！」

耳の中に活力が満ちてくる。ホントにいつも、前向きの人だ。思わず笑みがこぼれる。これがたわいもない話だといいが、こっちに手落ちがあるところ、こうは浮かれていられない。その指摘は全く容赦がなくて、音声を上げるでもなく、それでも鋭い。「気になってはいるんだけどなかなかできなくて。」

とても言おうものなら。

「何もしていないのと同じことだね。」

全く手厳しいが、言われると本当にそうだと、やらねばという気になるので不思議なものだ。この人はいつも動いていて、自分のやるべきを外さない人だと納得しているところがあるからなのだ。

ろう。『でも』という言葉が通じない。その分、腹立つこともあるが、言い分けの『でも』を使わなかったことで返ってスッキリする。

怒る時もそうだ。私も体中の毛を逆立てるような感じで、ガンガン怒るが、この人の場合も凄じい。空気が変わる。ビリビリとキレツが入るのがよくわかる。機関銃の掃射のようにその口は動き、手も足も出させない。血が騒いで逆流する。とはこういうものなのだ。客観的に見れる時は思う。

現代の日本社会は、こういう場面が少なくなつたようだ。言いたいことも言わず、ハッキリ言うて相手が傷つくとはかりに、まあまあ：なあなあわけのわからない適当まで終始している。そのうち自分の本心も見えなくなつて、個性も失くしてしまっている事が、多くなっているのではないだろうか。よく、子供に「ハイ」「アリガトウ」を素直に言えるように、と教える。自分も大切なことだと思っているが、成長するにつれ、「イエエ」という自身の意志と、相手の意志、それをどう認めあっていくのが、大きな鍵になることも気付く。相手の何を認め大切にするかは、互いの感情を育てることに欠かせないものだが、今は、それすらも必要のない時候挨拶で過ごしてしまっている感が強い。お金を払って自分の悩みを聞いてもらう。という商売に人が集まる、という記事等

を読むと、何だか心がうすら寒い。今日一日が無事であるように。今日一日が無難であるように。たった一字の違いだが、生きる意志は、ずい分違ふ。

友人によく言われるが、姉の顔はいつも洗いたてみたいにサッパリしている。私は冗談まじりに「人生の荒波にしょっ中洗われているんじゃないの。」と言うが、姉の生き様を見ていると、当にそうなのだ。

仕事と眠る合間に酒を飲み、テレビを見ながらふりむくとあちこちふいている。と思いつつ、気がつくとその手を止めてテレビを見ている。もう少し目をつむれば自分の体が楽なのに、と思うが、そう妥協しないところが姉の偉さであり、不器用さなのだと頷ける。多少汚れても死にはしないと私などは思うが、汚れていると皆がせいせいしない、と思うのが姉のようだ。我が強いようであるが、結構回りを想い、それで我が強い。主婦という個性の中には入りきらないようで、変わっている。と言われるらしい。(人のことは言えない)見ていて飽きない人である。今はそろそろなくなるが、セブンイレブンのおでんの鍋を見ると、すぐ姉のようだと思ってしまう。木杵に何かを許したくないようにキッチリと区切るあのみす目、その間にぐつぐつとおかまいなしに躍るように煮あがるそれぞれ、現実をガッチリ操縦しながら、寄道

した所ですっかり遊ぶ。それでいて流されることもない。やることは何がなんでもやってしまうという思い込みというか、気合というか、ま、めいっばい生きていくという感じ、これが何故おでんの鍋かというとよくわからないが、なんだかいつも思うのだ。(こんなの読んだら怒るだろうなあ)

「何であたしがおでんの鍋なのよ!。」

なにせ

「あたしの足が短いのは小さい時にあんたをおんぶったせいだよ。」

と人が覚えていないことでチクチクとつつくような執念深さもあるくらいだから。

姉妹―自分と姉はどうして姉妹なのだと思うことがある。何も別の人だっというじゃないか、夫にしても、子供にしても、なぜこの人と、なぜこの子が、などと時々妙に思いつめて考えたりすることだ。ある。仏法では、生命の永遠性から、眷属ということを教えているが、それにしても「縁」の不思議さをつくづく思う。姉妹でなかったらこんな深くつき合わない。こんなに腹立たせたり、悩んだりしない。人智の向こうの測り知れないしがらみを想うと、なす術もない時の流れの中に自身も生かされている気もしてくる。その中の血のつながりは、どうしようもなく懐かしく、狂おしいほどまどろっこしい。

姉の生き方を目のあたりにして、最近自分も身体芯で気づいたことだが、相手が自分の心に嘘をつく体だけは、認めてはならないんじゃないかと。姉妹だけでなく、友人でも男と女でも、それは、いつしか魂の鏡に陰りをかけ、偽りという時間を産んでいく。自分もそうだった。気づくのに時間がかかり、払った時には手が届かない所に逝ってしまっていた。投げ捨てたい自身の肉体を両手で抱えた血涙の日々。それでも生命は脈うつことを全身でふりしぼった時、自らの生きる舞台を悟る。

春一番に、なでられてアネモネは他愛もないが、陽ざしに負けじとパッと咲き誇っている。自然は時を重ねて、自分に嘘つかない。人間は年を取って瓦礫で体を飾る。濁流の歴史。

倉の財より身の財、
身の財より心の財第一なり

大聖の言葉が時流にささる。
桜の枝先が紅に染まる候――本番は今始まる。

あの店の店
いいお店

オレのつくる

ところてん
心太は日本一!

鈴木利賢さん

西伊豆・土肥町八木沢「盛田屋」

数年前、コンニャクの製造行程を見学に行った時のこと。盛田屋さんは、「オレのつくるものは理屈じゃない。味を見て、物を見て判断してもらおう」と、いったかと思うときあがったコンニャクの一つをつかんで、力いっぱいセメントにたたきつけた。

八木沢でとれる質の良いコンニャクイモを原料に、一個一個でいねいに皮をむき、時間と手をかけてつくったコンニャクは弾力性に富み、大きな力でたたきつけても形が崩れないのだと、あっけにとられている私たちに教えてくれた。

食べ物に、つくる人の心が感じられなくなった現在、そして、職人の術というものが片隅においやられている現在、地元を足場に気をはいている生産者の存在は、私たち消費者にとって何より頼もしく思えてくる。

三代目ががんばる

— こんにちは、お久しぶりです。

鈴木 やあ！遠いところごくろうさん。今日はたっぷり見て行って下さいよ。

— 利賢さんは何代目なのですか？

鈴木 明治三十年代に、うちの屋号をとって「盛田屋」として雑貨屋を開いたのが始まりで、昭和二十八年頃から、納豆やコンニャクをつくり始め、四十年代からところてんを手掛けました。オレは、三代目。

— 三代目の利賢さんになってから特に、「本物づくり」を目指されるようになったようですが、それはどうしてでしょう？

鈴木 やはり、つくるからには「本物」をつくりたいということだね。勉強して工夫をこらして自分自身の製法を産み出して、満足のいくものをつくりたい。それには、材料から本物にこだわらないとね。

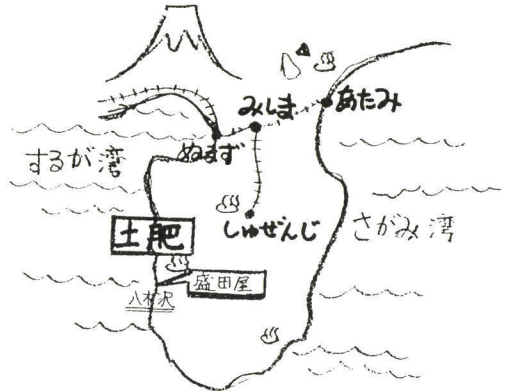
— でも、現在のような大量生産大量消費の流通システムの下では、見た目や「もどき」の味がびびり、添加物の使用が前提となっていますね。

ウソをついたら

長く続けられない。

鈴木 オレが思うのはね、ウソをいつたりごまかしたりしたら、長くは続けていけないことだね。

それと、食べ物には、地域性があるということ。ここ八木沢は良質の天草がたくさん採れる。この原料の産地で、原料が一番おいしくなるような製造をしたい。コンニャクはね、従業員の潮木くんががんばってくれているけど、最近、コンニャク芋がとれなくなってきたてね。以前あんたっちが見学にみえた時には、ここ八木



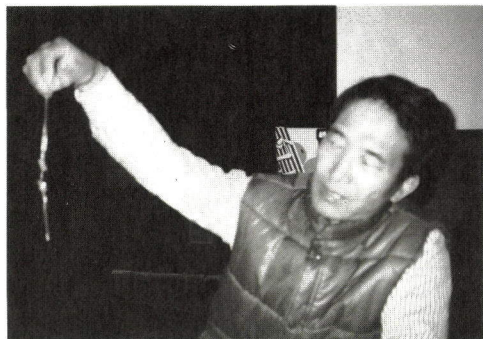
沢でとれた無農薬のコンニャク芋を使っ
てじっくりとつくっていると胸を張
ったけど、現在はなかなか原料が
手に入らなくて困っています。
食べてみて下さい。

うちのトコロテンは日本一！

ほら、見てください。(製品の
一つをとってふたを開け、トコロ
テンを一本つまみ出して)、長い
ですよ。うちの濃度も濃いしコシ
が強いので切れにくい。どれも
三十センチほどあって、ほら、
(トコロテンを玉結びにし、つ
りと下げてそれをほぐく)

ーうわぁ 弾力性があるんですね。

鈴木 (さらに玉結びを一本のトコ



「ホラ、玉結びが何個でも！」

ロテンで三個、四個とつくりながら
短時間ででき上がる圧力釜を使わず、
うちは昔ながらの煮出し法で、じ
くりやっているからね、トコロテン
はアルカリ性食品だし繊維質にも富
むし、健康にはもってこい。そして、
オレのつくるトコロテンは「本物の
味」だと自負しています。だから、
たくさんの人に食べてもらいたいね。
特に子どもたちには、昔ながらの本
物の味を知ってほしい。お母さん
たちには、こういう食品を毎日の食卓
に出してほしいなあ。

ーこないもののどうして

買ってくれないだ？！

ーいい物っていうのは、素材もい
いし、手間ひまかけてつくるので
どうしても高くなる。そうすると売れ
ないという難しさもあるのでは？

鈴木 うん。本物をつくっても売
るっていうのは難しいね。特にス
ーパーへ持って行くと、安くするよ
うにいわれるけど、オレのは、例
えば、付いているタレだけでも無
添加のものを業者で特別つくら
せている。これ

以上値を下げられないというぎり
りの線があるね。だから、たく
さんの人に味わってもらいたい
けど、置いている所は限られて
くる。消費者の人たちにも
値段や見た目だけでなく、
本物を見分けられる力を持
ってほしいなあ。どうして、
こない物買ってくれないんだ
？と思うよ。苦労して「本物」
をつくっても、相手に分か
らないうえに、

でもやはりトコロテンや
コンニャクなどを、日常の生活
になくてはならないもの
にしたい。いいもの、おい
しいものをふんばってつくり
続けて、わりじわりと広げて
行きたいね。

土肥町の元教育長で、やはり
この地で有機無農薬による
農業を手がけているグル
ープのリーダーであった吉
田芳郎さんは、去年の暮れに
急死された。鈴木さんは吉
田さんの親戚筋にもあたり、
研究グループの仲間でもあ
ったので、大きなショックを
受け、また、この痛手から
抜け出せない

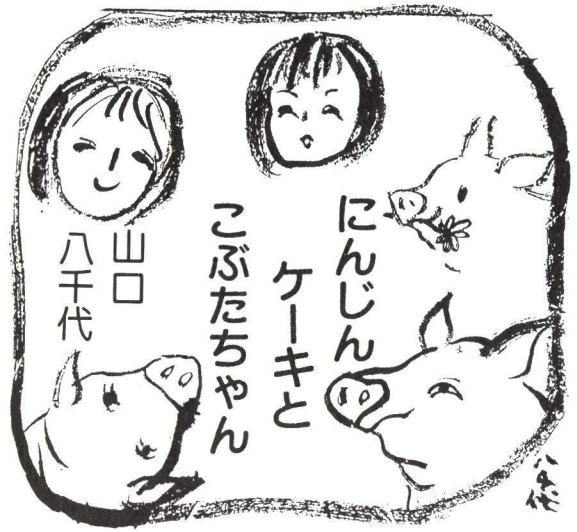
トコロテンはなぜ「心太」

「心太」と書いて、トコロテンと読みます。トコロ
テンは、テングサ類から熱湯により寒天質を抽出して冷却
し、ゼリー状にしたもので、トコロテンは日本独特の海
草製品であるばかりでなく、大正時代にその名が見え
るところから、奈良時代以前からあったことは確実です。
そのころはこの食物をさす名は特になかったですが、
平安時代に「古々呂布止(ココロフト)」と呼ぶようにな
って、俗に「心太」の字があらわれました。
この「ココロ」とは「コル・コロル(凝る)」こと、「フト」
とは餅に類する食品のことだといわれ、ココロフトとは
「コゴリ固まった餅」という意味なのです。室町時代以
前ではまだココロフトであったのが、室町になってコ
ロイと言いかえるようになり、ココロイ→ココ
ロフト→トコロテンと転化していきました。トコロテンとい
う名が一般的になったのは、江戸時代の寛永年間とされ
ていますが、文字の方は「心太」としてそのまま残りまし
た。現代のわれわれの感覚からすればよほどのあて字の
テングサのことも「ココロフト」といいますが、後代
になってトコロテンの原料であるところからトコロ
テングサというようになり、上部を省略してテングサの名が
生れました。

暮らしの2015日「生活歳時記」より

いでいる、という。故吉田さんは、
町の生ゴミ処理と手をむすび魚粉等
から有機肥料をつくり出す研究に寝
食を忘れていた。研究熱心というこ
とでは鈴木さんもよく似ていて、ト
コロテンの品質検査をしてくれる所、
良い製造業者、彼のトコロテンを扱
てくれる店があるなどどんな遠くでも
飛んで行く。工場では、八十歳を越
えた彼の母親が元気に働きまわり、
無言で息子の姿勢を支えている。

(インタビュー / 平井)



お日さま　さんさん　いいてんき。まりちゃん
とさっちゃんはお山へさんぽにでかけました。
どんぐりばやしのかかげに、ぶたのかぞくがゴ
ロゴロとねころんでいました。

「ぶたぶたこぶた、こっちまでおいで。いっしょ
にあそんで、ばいばいしようね。」とさっちゃん
がふしをつけていました。おかあさんぶたはよ
こめでチロツとこちらをみて「ぶたはねるのがしよ
うばい」とねころんだままでいいました。おと
うさんぶたはみみをチョコツとうごかして「ぶたは
ふとるのがしよばい」とねころんだままでいい
ました。

「おおきいのとちゅうくらいとちいさいこぶたは
しっぽをくりっ、くりっつとふりながらはしってき
ました。「ウィッ・ウィッ・ウィッ」
「あそぼ、あそぼ、なにしておぼ」
「ハンカチおとし」とまりちゃんがいました。
「ぼくたちハンカチないもんね。」ちゅうくらの
こぶたがいました。

「みみずほり」とおおきなこぶたがいました。
「みみじゅほり」とちいさなこぶたもいました。
こぶたたちははなでぐいぐいじめんをほってみみ
ずをどんどんつかまえました。

「あたしたち、ぶたちゃんみたいなすてきなはな
ないものね。」とまりちゃんがいうと「みみずほ
くじょうのばんにんをしてよ。あとでかぞえてい
ちばんたくさんとったものがゆうしようだよ。」
とおおきいこぶたがいました。

こぶたは木のぼうで三つのわをかきました。お
おきなこぶたはおおきいわ、ちゅうくらのいのかぶ
たはちゅうくらのわ、ちいさなこぶたはちいさ
なわ。どのわにもみみずがいっぱいになりました。
「かぞえよう。かぞえよう。」

「いもっ。にんじん。みみず。しかのふん。」
こぶたたちはこえをそろえてかぞえはじめました。
でも二つめのにんじんのときとでもちいさなこえ
でいうのです。

「なぜにんじんはちいさなこえでいうの」
「おれっち、にんじんきらいだからな。」

「まえにおおきなこえでにんじんといったらゆう
ごはんはにんじんだけだったんだ。」とこぶた
ちはくちをとがらせました。

「じゃ、にんじんケーキっていえばいいのに。」
「にんじんケーキってなんだ。」

「あまくて、ふわふわで、みかんいろ。おいしい
よ。」さっちゃんはおかあさんのつくるにんじ
んケーキをおもいだしていました。

「あまくて！」おおきいこぶたはのどをゴクンと
ならしていました。

「ふわふわで！」ちゅうくらのいのかぶたは、のど
をコクンとならしていました。

「みかんいろ！」ちいさなこぶたはのどをクチュ
とならしていました。

「いもっ。にんじんケーキ。みみず。しかのふ
ん。」こんどはともげんきにかぞえました。

まりちゃんとさっちゃんは「いちご、にんじんケ
ーキ、みかん、ごはん」といいながらかぞえました。
「くうなよ。かぞえるまでたべちゃだめだよ。」

とおおきいこぶたはりょうてをひろげていいま
した。でもみみずはあまりおいしそうにみえませ
んでした。いちばんたくさんとれたのはちゅうくら
いのぶたでした。「いもっ！にんじんケーキ、

みみず、しかのふん、ごりら、むし、なつとう、くじら、とまーと！すごいなあ。ゆうしょう。」
「とまとっていっぱいなのね。」まりちゃんとさっちゃんはともかんしんしてしまいました。二人は花をつんでかんむりをつくりちゅうくらしいのぶたにかぶせてあげました。

それからこぶたたちはゴロゴロとつちぐるまをしてあそびました。どろんこのさかみちをくるまのようにコロコロころがるあそびです。まりちゃんとさっちゃんもくさのはえているさかをコロコロころげてあそびました。「ぶたちゃんはつちぐるま、あたしたちはくさぐるま」こぶたたちはどろんこのくろぶたさんになりました。

「おやつだよ」かあさんぶたのこえにこぶたちゃんたちはちかくのおがわでパチャパチャからだをあらってからはしっていきました。「おじょうちゃんもたもおやつにしかのふんをおあがり」ぶたのかあさんはせいっぱいやさしいこえでキイキイといました。

まりちゃんとさっちゃんはかおをみあわせて、「しかのふんておいしいのかなあ」とかんがえました。それからふたりはいいました。「ありがとう。でもおかあさんがまってるから。」

まりちゃんとさっちゃんがスキップしながらおうちのドアをあけるとブーンといいかおりがた

よってきました。

「あっ、にんじんケーキ！」

「こぶたちゃんのよげんはあたたかだね。」

「まあ、どろんこになって、たのしかったの？シャワーをあびてからにんじんケーキをおあがりなさい。」おかあさんはニコニコしながらいいました。まりちゃんとさっちゃんはあしたこぶたちゃんたちになんじんケーキをもって行ってあげようとおもいました。

(家の光 幼児のための 童話賞佳作入選記念)



佐知子のつばやき

石井清子

☆夫婦の会話で、

『たまには、フルコースで、食事がしたいね。』

そこへ9才の娘わりこんで、

『古いお食事なんかすると、おなかこわすよ。』

『ん？』

☆8才の時、霜の降った、タンポをみて

『わー！たんぼ、フケだらけだ』

☆小雨と言う言葉をおぼえた6才の頃、空をみあげて

『今日は、小雨かな、中雨かな。』

☆テレビでピアニストの演奏をみ、

『すごい。この人、指が六本つつあるんだよ、きっと。』



—子どもたちに夢を—
親と子のよい映画をみる会

松村 百合子

「えっ！もう五年もやってるの？」

一緒に活動している仲間たちでさえも、修善寺に「親子映画」を作った五年も過ぎてしまったことを忘れてしまっている、そんなグルーヴです。「子どもたちに愛と夢を！希望と勇気を！」こんな合言葉で、よい映画を親子で選び、親子で見よう。そして、親子で語り合おう。と、互いに声をかけ合いながら、十二回の映画会を開いてきました。

「青葉学園物語」「対馬丸」「こんにちわハース」「グリックの冒険」「あほうどり」と11匹のネコ……「はれときどきぶた」「やがて春」

までの十二本の映画をふり返るたびに、眼をかがやかせて「この映画、また見たいナ」と映画を楽しみに、映画の中に夢を見つけてくれた子どもたちと出合うことへの感激が忘れら

れず、「疲れたネ」とため息をつきながらも頑張っています。

それにしても、よいと思って動き出したくても動きの取れない世の中のしくみは、どういうことでしょうか。子どもたちに、優しい心を育てたいと願って選んだ映画も、テレビで人気のアニメーションにはかなわない。チラシを持って学校へ行くと、

「よい映画だが学校は介入できない」と断られ、それでも一人でも多くの子どもやお母さんに見てもらいたいと、身近かな方からの広がり心にかけています。私たちの会は、ひとりでも多くの方に見ていただくことによりその収益が次期映画の製作費となります。又、希望を取り入れての製作活動、映画出演なども可能で私たちが映画を作るような気分です。次回上映会は、

五月十四日(日) 修善寺中央公民館「チロヌップのきつね」千島のウルップ島のきつねのおはなしです。ぜひ見ていただき、私たちと一緒に子どもたちへ夢を届けるお仕事を

やっていただけませんか？

(Tel) 〇五五八―八三一―二四〇一

(修善寺、中伊豆町)

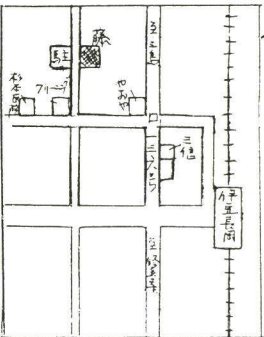
— 文芸同好誌 —

翌 なるす 檜

工藤 寛

昭和六十三年六月創刊、同九月第二号、十二月第三号と定期発行を続けています。現在正会員の数は二十三人、定期講読者は三十人ぐらいで北海道、東北、埼玉、山梨、東京、神奈川、静岡と分布しており、年齢は二十代から八十代で老若男女多様です。

発行の趣旨は創刊号の巻頭でも記しましたが、現代社会の情報過多に、とすれば自分というものを見失いがちの時代に、しっかりと自分というものの足跡を残しておく。作品の良否、体裁にはこだわらず、書き残しておきたいと思う自分史を刻んでおく、そんな人達の同好誌です。会



居酒屋

藤

長岡駅前 ☎49-3933



「さおと女会」というのは、兼業農家が増す中で、農業一筋に頑張っている中伊豆町八岳地区の同世代（三十六才〜四十六才）の婦人の集まりです。

中伊豆町には、全国に名の知れたわさびと椎茸という二大特産物があります。会員はこの特産物、特にわさび栽培に従事している女性がほとんどで、二十六名です。

比較的恵まれた農業と言われるわさび農家も、毎日が山の中の家族労

ブルー作品介绍



員の原稿は原則として全部掲載しておりません。

会費は正会員一年分（四回発行）六〇〇円、定期講読は一年分（四回発行）二四八〇円送料込

発行所 修善寺町大野二〇五六
電話〇五五八（七二）一五九八

—土に生きる—

さおと女会

内田ゆり子

働ですので、とかく外部との交流もなく、平坦な毎日です。そんな生活の中で働く女性達が、お互いに励まし助け合い、仲間作りをしようと三年前に作られました。

活動としては、毎日の生活の中で起きる諸々の問題点を出し合い、納得のいくまで話し合う、話し合いの会が主体です。この話し合いは、内容もさることながら、まず会員二十六名の前で話せるお母さんになろうということが目的です。人の前で話すということは、しっかりした自分の考えを持たなければなりません。

とかく都会の人達に比べて、消極的だといわれる農家のお母さん達がこうした機会を持つことにより、人の前で話せるようになったら素晴らしいと思います。この話し合いの会には、時には講師を招き、税金、農業情勢、嫁姑問題等勉強会も開きます。

又年に一度、農業の先進技術を見学しようと視察旅行を行なっています。バイテクや養液によるわさび栽培、種々の産物の加工場、農業高校

の視察等、手作業による自然農法の会員にとって、これ等の農業技術は目を見張るものばかりでした。今年度は横浜の検疫所を視察する予定です。そして又隔月会報を発行しています。この会報には会員の飾らぬ声が掲載され、お互いの情報交換にも役立っています。

農家のお母さん達がしっかりした考えを持って人の前で話せ、書く事に興味を持つようになったら、今盛んに叫ばれている女性の地位向上にもつながるのではないのでしょうか。

厳しさの中の農業だからこそ、男性に頼るだけでなく、女性が何事にも実力をつけることが大切だと思います。その為にも、この「さおと女会」の成長を心より期待しています。

(Tel 〇五五八―八三一〇五五八)



温泉水院
陶器
バス停
伊豆
中伊豆町
しんじょう
電話 0558-83-1845



松本かつぢ

戦中戦後、少女たちに明かるい夢を送りつづけた抒情画家松本かつぢ氏は、晩年をこよなく愛した中伊豆で娘さんの田原明子さんとともに過されました。これはその思い出の記です。

父の散歩

田原明子

父は一日の仕事が終わった夕方、あるいは夕食の後必ずといっていいほど毎日運動を兼ねた散歩に出かけた。散歩といっても近所の人に会いそうな近い場所へは行かず、電車かバスに乗って都心かそれに近いにぎやかな所と決っていた。住んでい

たのが都内といっても世田谷のいちばんはずれの田園地帯でちょうど今私の住んでいる中伊豆のような所だったから駅まで歩くだけでもかなりの距離だった。その道を父は背すじをピンと張って大股で歩くのでついていく私達は大変だった。子供は全部で七人いて、父はその都度適当に二人づつをつまみ上げてはお伴に連れていってくれたものである。次は誰の番になるか皆内心ワクワクして待っているのだが、よくしたもので不公平にならないようにまんべんなく選んでくれていたように思う。夕食前なら銀座のスエヒロのハンバーグか

伊勢丹の特別食堂のお子様ランチ、夕食後ならモンブランのケーキ、夏はかき氷と決っていて、早く自分の番が来ないかと心待ちにしていた。こんなことがあった。ある夏の夜、例によって食後の散歩に出かけた。お伴は私と妹、その日はどういう訳か父が一向にお店に入ろうとしないのである。『氷』という看板を見る度に妹と私は顔を見合わせるのだがさっぱりお声がかからない。そのうちしびれを切らせた妹が父の手をひっぱって『お父ちゃん、食堂に入るとお水飲ませてくれるよ』と言ったものだから通りすがりの人が振り向く程大きな声で笑った父が『お前さんにはかなわない』と言ってとうとう私達はかき氷にありつけたのである。

散歩と言えば父は大変きちやう面な性格で妙なクセがあった。出かけると必ず2、3回は戻って来るのである。道に落ちている針金、釘、鋌などを見過すことができず拾って来ては小さな引き出しの沢山ついている桐のタンスにそれらをきちんと分類してしまっておくのである。生活の知恵の豊富な父は必要な時それらを出して来て、時には長すぎるコードを結んでみたり、すだれの長さを調節する道具を作ってみたりしていた。父の身の回りはいつでもきちんと整理されその上使いやすいような工夫がずい所にされていた。絵筆や絵の

具を並べてしまっておくアルミのお盆を利用した引き出しなどはけっさくのうちのひとつで亡くなった後、お弟子さんに形身としてさし上げた。職業柄、父のそばにはいつでも紙やエンピツがあつて何十色もそろつた色鉛筆などは子供にとつては夢のようなものだったが、父は使い残した鉛筆や消しゴムと描き損じた画用紙をいつでも子供達が使えるように仕事机の横にきちんととっておいてくれた。子供達は欲しい時にそこへ行けばいつでも（父のごきげんの悪い時を除いて……）紙や鉛筆を手に入れることができた。七人いる子供達が殆んど全員父と同じような道をたどつたのもその辺が大きく影響しているのかも知れない。

自由が好きで干渉したりされたりを大変嫌つた父は散歩に出かける時、「どこへ行くの」とか「いつ帰るの」と聞かれるのを不快に思つていたようである。こりずに聞く母に父が答えるのを聞いたことがない。

このクセは終生直ることはなく、晩年かなり老人性痴呆が進んで周囲の状況が判断できなくなつてからも「どこへ行くのですか」という母の声を背に不自由な足を引きずるようにして出かけては途中で保護されたりした。亡くなる数ヶ月前もうかなり手足が不自由になつていたのに風呂敷に大好きだった東山魁

夷の画集とタバコを包んでそれをかかえて家を出た父が修善寺駅までの道を歩き切れず立ち往じようしていた姿は今でも臉に焼きついている。

若い頃散歩の途中で何か気に障ると急に踵を返して黙つて家に帰つてしまつたり、どんなに催促の電話がかかつて来ても気が進まないと決して仕事をしようとしなかったり、子供心には理解できない所を沢山もつた父だったが、父として男性として、何よりも人間として魅力的だった彼は数多くの逸話を残している。こうして父の思い出を書いていても次から次へとつきることなく思い出されてくる。こんな父をもつたことをつくづく幸せに思う。



手作りを楽しもう（手編み・パッチワーク）

稚筍房

手あみ教室 ち 稚 筍 房 じゅん ぼう

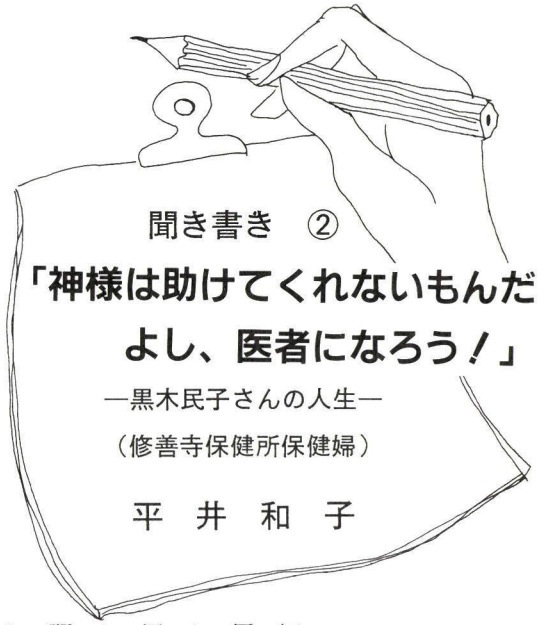
昼の部：午前10：00～午後4：00
火・金（月8回）

夜の部：午後7：30～10：00
月・木（月8回）

編みたいものを編みたい手で、希望のサイズに編みたい方は是非どうぞ。

中伊豆町 小川

〒410-25 静岡県田方郡中伊豆町上白岩1320
TEL (0558) 8 3 - 0 6 3 1



聞き書き ②

「神様は助けてくれないもんだ よし、医者になろう！」

—黒木民子さんの人生—

(修善寺保健所保健婦)

平井和子

一、「よし、医者になろう！」

黒木民子(旧姓竹内)は、一九二八(昭和三)年、信州のちいさがた小島郡(現上田市)に八人兄弟の五番目として生まれた。父、竹内八郎は農家の三男だったので分家して、近所のお寺の土地を耕す小作農民。母、なつは、当時村ではめずらしく字が読めため、婦人会の会長などを務めていたが、体が弱く、時々胃がいれんなどを起こして、近所の人々にかつぎこまれたりしていた。

その母は末の妹を産むと寝つき、半年後に亡くなった。民子が尋常三年生の六月のことである。

それまで町から何人もの医者に来て診てもらったが病名もよく分からないままで、死亡時の病名は結核とされた。八人の子を産み、百姓仕事と養蚕と、働きづめで、「栄養状態も良くないし、無理

に無理を重ねた結果でしょう」と民子はいう。

寝ついた母の枕元で、幼い民子のできる精いっぱいのは、毎日一升びんに水を入れ、「どうぞお母さんを助けて下さい」と念仏を唱えることだけだった。しかし、そのかきもなく母は死んでしまった。この時、民子は、「神様というものは助けてくれないもんだ。よし、それなら腕の良い医者になろう！」と、独り、心に決めた。

近所の人々は母が寝ついた時から、「人にうつる病気にちがいない」とうわさしていたらしいが、母が亡くなると、役場の職員が消毒器を持ってとんできたこともあって、いよいよ寄りつかなくなつた。民子たち姉妹は並べられ、ふんむ機で頭から消毒薬を浴せられた。家の中も三日間かけて消毒され、とう分その臭いが消えなかった。家のそばを通る人は、みんな口をしっかりと押えて、小走りに駆け抜けて行く。それまで遊びに来ていた友達も来なくなり、学校へ行ってものけものにされて、ずい分切ない思いをなめさせられた。

しかし、彼女には勝気な、「負けじ魂」みたいなものがあって、「りっぱな医者になる！」という目標もあったから、それで自分を励まし励まし、勉強に身を入れることで乗り越えてきた。

二、従軍看護婦養成所へ、

民子が小学校の高等課を卒業する一九四二(昭和十七)年は、長い中国との戦いが泥沼化し、東条内閣はその打開策として南進作戦を展開し、一月のマニラ占領、二月のシンガポール占領、続く三月のランゲーンやジャワ島占領などと、さらに絶望的な戦火の拡大を歩んでいる時期であった。そのような中で、戦地へ赴く日赤従軍看護婦の紺の制服制帽と編み上げブーツは、「お国のため」

数ヶ月先まで予定がびっしり詰って、「身動きがとれない！」と逃げ腰の修善寺保健所の保健婦黒木民子さんをつかまえて、無理に時間をとってもらった(それでも一ヶ月程待ちました)、八八年の師走。暖かい日射しの中を出かける。黒木さんといえば、性教育。修善寺はもとより田方郡下で、その歯に衣着せぬ語りには定評があり、広くこの地の母親たちの共感を呼んでいる。自分自身の苦い体験を踏まえて、心理学の知識も取り入れ、「この、私なりの性教育というものをつくりあげるのに、十七年かかりました」という彼女は、地道ながらも一貫してやってきたことが、受け入れられ、役に立っていることに、いま、確かな手応えを感じている。幸せな女性だ。

に雄々しく働く女性として、憧れの目で見られていた。しかし、戦争の拡大に伴ない、看護婦の数が払底し、陸軍、日赤とも採用基準や養成規則をつぎつぎに緩和せざるを得なくなる。日赤は、乙種、臨時救護看護婦を設け、資格年齢や養成年齢を引き下げ、ついに一九四四（昭和十九）年九月には、陸軍が一般女性から看護婦生徒を募集するに至っている。このような超スピードで養成された看護婦たちは、つぎつぎと戦地へばらまかれ、敗戦時に集団自決に追いこまれたり、走逃行の果てに病死したりしたケースが多い。戦時には兵隊と同じく看護婦たちも「消耗品」として軽い命であった。

さて、小学校の卒業をひかえた民子は、長野市の陸軍病院が看護婦を養成しているのを知り、試験を受けて合格する。ここでは陸軍従軍看護婦を三年間の期間で養成するとされていたが、傷病兵はどんどんふくれあがるし、看護婦数も不足するし、民子たちが腰を落ち着けて勉強できたのは初めの一ヶ月だけで、二ヶ月目からは朝から深夜まで看護や洗濯に走りまわり、午後の二時間だけが講義としてかろうじて確保されているような状況だった。

同期生たちの多くは、やはり従軍看護婦に憧れて入って来ていたが、民子自身は、「医者になる

んだ！」という熱い思いで、限られた選択内を少しでも夢の実現に近づくための、「初めの一步」であった。彼女は、いつもその思いを口にしたので、傷兵の中にいた元中学の先生が、それなら、と中学の講義録を取って通信教育による資格取得をすすめてくれた。医者になるためには女医専へ行かねばならず、そのためには中学の卒業資格が必要だったからである。

一九四四（昭和十九）年になると、前年のガダルカナル島撤退、アッツ島の守備隊全滅からサイパン陥落、硫黄島玉砕、そして沖繩戦へと、これまでの日本軍の侵略行為が日本本土へ向って逆襲して来るようになった。十一月にはサイパン島から飛来する米軍機による本土空襲が始まり、灯火管制が敷かれるようになる。その為、夜、部屋での勉強ができなくなったので、民子は中学の講義録を持って、上級生の目をぬすんでは便所へ行き、（そこは豆電球がずっとついていたり、完全な個室だったので）、電球の真下に便器を抱きかかえるようにして、しゃがんで勉強した。この時の苦労話をするときみながら、「臭いからよく覚えられたら」と笑われるという。

三、「ついでに、がんばりようね」

従軍看護婦養成所の三年生の夏。中学の通信教

育の方もあと半年でその資格が取れるという一九四五（昭和二十）年八月十五日の敗戦。「そこで、それまでの積み重ねが、全部、パア。もう私たちは従軍看護婦にもなれないの」。

でも、ここががんばりどころ。ショック状態から、いち早く目覚めた民子は、翌年主席でこの養成所を卒業。そして、「もう、こうなったら、全部の免許を取ってやれ！」と思いたち陸軍病院に併設された保健婦学科に入学した。友達の中には、まだ諦め切れず、引き揚げ船に乗って看護にあたる人もあった。

保健婦の資格を取得すると、「さあ今度は助産婦だ」ということで、民子は「たん実家へ帰り、家を手伝いながら長野市の助産婦学校へ通い始める。助産婦の資格取得試験は、一年に二回あり、学科試験と実地試験の二段階であった。優雅に通学もしてられないと思った民子は、夏休みに集中的に勉強し、秋の試験に挑戦することにする。



四、民子式勉強方法

民子は、毎朝おにぎりとおむしろを持って山へ登り、独りで慶応大学の安藤画一氏の「産婆学」の本を大声で読み上げ、丸暗記した。次に問題集を買ってきてこれも丸暗記。コツさえつかめば、若い頭脳はどんどん新しい知識を吸収してくれた。学科試験の願書を民子は、長野だけでなく隣接する県にも出し、夜行列車で出かけて、朝、試験場へ駆け込み、試験を終えるとその足で帰ってきた。こうすれば宿泊代がかからなくてすむ。

願書提出県の全てに合格した民子は、「さあ、今度は実地試験だ」とはりきり、近所の産婆さんの後をくっついて歩いたり、汽車賃稼ぎに土方までやって働く。

五、ベビーブームで眠る間なし

こうして助産婦の資格試験に合格した民子は、郷里の知人の紹介で、東京の上野にあった坂本助産院で働くことにした。彼女が、「あの時のけたましい忙しさを思えば、その後のどんなことだった、まだまだだ、と思えます」という、ここので生活は、一九四七年〜四八年（昭和二十二年）で、ちょうど戦後の第一次ベビーブームに当たる。民子の記憶によれば、お産は少ない日でも、四、

五件はあり、彼女はお産とお産の間にたらいでおむつを洗いながら、数分眠るとか、おむつの交換をしながら一瞬眠るなど、どこでも身体を休める術を身につけたのはこの時だと笑う。又、乗れない自転車に「どうしても乗れるようになってもらいます！」と、特訓された苦い思い出もある。

このけたたましい日々の中でも、民子にとって後々まで役に立つ勉強となったことがある。それは、慶応大学の安藤先生のラマーズ法の講習会に、助産院から二十日間通わせてもらったことである。ラマーズ法といえば、アメリカのウーマンリブのしぶきを受けた七十年代、八十年代の男女の間で、「お産も主体的に」、「自然分娩で」という思いの中で広がってきているが、民子はずい分早い時期にこの方法を知り得て、自分自身のお産の時にも、この呼吸方法をやったという。

六、伊豆の地へ

あまりの忙しさに民子はここから逃げ出す策を弄する。関東通信病院の看護婦募集を知り、こっそり受験して合格し、郷里の兄にわざわざ出て来てもらって、「結婚」という名目で辞めさせてもらうことにした。「そう…結婚ならしかたないね」と、助産院の方でもしぶしぶ諦めてくれた。

民子の新しい仕事場は函南の伊豆通信病院。こ

こで世話する人があり、今度は本当の結婚となった。夫は宮崎出身であったので彼を育ててくれた祖父母のいる日向に、民子たちは一九五五（昭和三十年）から八年間住んだ。この間、二人の子どもを育てながら、町の教育委員会から頼まれ、春先になると下の男の子（一九五八年生）をおぶって、ツベルクリンやBCGなどの接種をして、各学校を独りで廻って歩いた。よく校長先生が子守りをしてくれたが、息子は泣いて泣いて、気の縮む思いだったという。

祖父母が亡くなり、都市整備計画で立ち退きが決まったのを機に夫婦は相談して、温暖な伊豆へもどってくる。そして、一九六四年一月から、民子は前任者の強い申し入れで、修善寺町の保健婦として働くことになった。以後これまでの二十五年間を、この地の人々の心強いパートナーとして、がんばってきた。

女が働き続けようとする、とりわけ心のこもったよい仕事をしようとするほど、家庭のことや子育てとのほざ間で苦悩することが多い。民子自身も常にその葛藤の中で自問自答をくり返してきた。そして、「お母さん方に私と同じ轍を踏んでほしくなくてね……」という思いで自分なりの「性教育」というものをあみ出してきたという。十代から走り続けてきた民子は、この三月、定年を迎えた。



『春に発つ船』（けやき書房）

古屋 美 枝 著

ひらい かずこ

西伊豆、土肥に住む著者が、戸田でのロシヤ船建造という史実に基づいて描いた本格的歴史小説。

この作品は、『子ども世界』・児童文化の会の第八回新人賞を受賞し、同会の創立二十五周年記念に際して単行本にまとめられた。

幕末、日本の開国をせまってきたロシアの軍艦ディアナ号は、一八五四年の安政の大地震による大津波で損傷した。その修理の場として選ばれたのが、西伊豆の戸田。しかし、ディアナ号は戸田への回航中、台風に遭い、沈没。その代替の船―戸田号―建造の過程と村の人々とロシヤ人たちの交流、腕の良い戸田の船匠、鍛工たちの働きぶりなどを、十一歳の少年和吉の目できらえ、しっぺかり

とした取材の上に、活々と描いた力作である。

主婦であり、お店も営んでいる著者古屋さんは、これを書くための時間として、毎晩二時間を確保したという。戸田の船匠たちに魅せられ、憑かれたようにして書き上げたこの作品は、地域の歴史や文化を知る上でも、又、日本とロシアの関係のスタートを知って現在の問題を考える上でも、重要な、スケールの大きな魅力を持っている。子どもだけでなく大人も是非一読してもらいたい作品である。

古屋さんは、また『若草』という主婦の作文を綴り続けているグループの会員でもある。毎月、一冊ずつ発行される『若草』は、私たちの『草の指環』の大先輩ともいえる。彼女の原点には、幼い心で感じた戦争時代のことがあるという。強制連行されて来た朝鮮人たちの姿や、空襲への恐怖などだ。これらを中心に据えた彼女の次の労作を期待している。

『クレオパトラも愛した

ハーブの物語』

(PUB研究所)

永岡 治 著

斎藤 みち子

三、四年前に知人より、ハーブを沢山頂いた。私の育てている物より

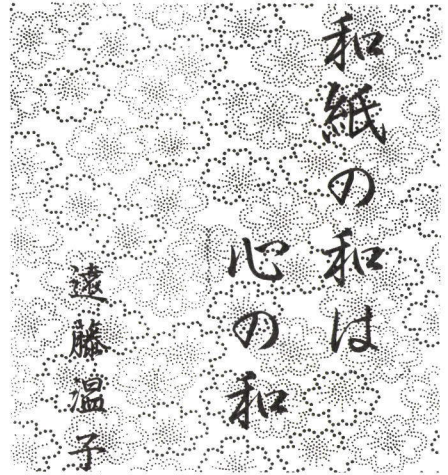
ずっと見事なハーブであった。私はそれらをお茶、お風呂、料理、ポプリ等に利用し、随分楽しんでもらった。『草の指環』二号の「めっせーじ」に、永岡氏が「草（ハーブ）

は、今の私にとっても最大の関心事です」と書かれてあったので、一度お話を伺う事が出来たらと思っていた。その矢先に『クレオパトラも愛したハーブの物語』が出版された。一ページ一ページめぐる度に胸ときめく本である。副題に「魅惑の香草と人間の五〇〇年」とあるように、前半は古代、中世、近世のハーブの歴史が書かれてあり、大変興味深い。ツタンカーメンの墓から、香膏の入った壺が出土し、四千年前の香りが消

えずに残っていたとか。古代オリエント文明の香料は、それほど高水準のものだった。私はこういう箇所を讀むとハーブに限りなくロマンを感じてしまう。又後半には、近代文学に描かれたハーブや、歴史のあるハーブを四〇選しての解説が詳しく述べられている。

永岡氏はまえがきで、ハーブの香りと味は、人間が遠い昔から慣れ親しんできた自然の素朴なそれである。科学万能、経済優先の現代社会において、人工合成香料やハウス栽培の野菜、果物が氾濫する今、人びとはようやく本物の香りと味の素晴らしさに気づくようになった。自然の象徴ともいべきハーブが復活し、普及していくことは喜ばしい。それは究極的に現代人の価値観の基本、人間としての生き方が問い直されることであり、人間らしい人間が増えていくプロセスだと思ふからである。と記している。

「あなたもこの本を手にとって、ハーブのある暮らしをしてみませんか。」



宮城県白石市に楮の和紙を漉いている白石和紙工房があります。七年前の夏、蔵王へ登っての帰りにお寄りして、素晴らしい和紙とそれを漉かれる遠藤忠雄先生御夫妻に出逢いました。

白石は昔から紙漉きの盛んなところでしたが今ではこの和紙工房一軒きりです。古くから楮の品種改良が行われ、上質な楮が栽培されるので全国各地にある和紙の中でも特に上質な和紙が漉かれています。遠藤先生の日頃の御努力の成果でもあることは言うまでもありません。

紙と云えば弱い破れやすいというのが通念ですがこの和紙は丈夫です。昔ワラ草履で歩くとき一日三足必要と云いますが和紙で作った草履では、仙台から江戸まで一足でたりたそうですからどれ程の丈夫さか想像できます。ここ、みちのく紙は古

くから、(記録によれば二五九年以前) 紙子と云って衣装や寝具にしていました。紙衣とも書きます。紙衣は湿気を寄せつけないので刀剣の袋や楽器の袋に使われます。最近では四年程前、三宅一生さんが、パリ・コレクションで紙子の作品を発表され、素材が紙ということでも話題になりました。型ぞめしたり、絞りぞめにして、財布、ペンケース、座ぶとん、などが作られます。紙子だけでなく紙をそのまゝ色や柄をつけたりしますが、その時の染料として、クルミ、スオウ、キハダ、などが使われます。これらは奥様のまし子さんのお仕事ですが、最も大変なのは紙布織りをしていらっしゃることでしょう。一度絶えた紙布織りを再現し、今に生かして織っていただけるのは容易なことではありません。一度漉いた紙を細く裁ち、よりをかけて糸にしそれを織機にかけて手織りにします。タテ糸を絹とか木綿にしてヨコ糸を紙系にした交織もありますが、タテヨコ共紙系の紙布など根気のいる仕事です。紙布は丈夫で肌ざわりがよく手織りの風合のよさは格別です。頂いた紙布をふた夏着用し云われた通り洗濯機でガラガラと洗ってもビクともしません。愛用して四十年の寿命という紙布ですから二年くらいでは平気です。夏に伺うと奥座敷に紙布織りの夏用の袴がかけられています。

蟬の羽のように薄く美しいそれはタテヨコ共紙糸で織られて見事です。

白石和紙を説明するのにすぐわかって頂けるのは、奈良東大寺の修二会の練行僧の着る紙衣が、それです。正月の寒い時に漉かれて、二月中旬、先生御夫妻は東大寺に納めに行かれます。

皇太后陛下の絵の恩師でいらした川合玉堂先生は、蔵王紙と命名して白石和紙(その頃は一軒きりでなかったのですが)遠藤先生の漉かれた和紙しかお使いになりませんでした。

白石和紙は漉かれる先生のお人柄そのまゝ、おだやかで、ふくよかで、真白、やさしい風合の中にしっかりとした強さがあり落着かぬ日、何か自分の心の中に迷いのある時、紙一枚眺めて心の中が、平静になり、迷いが消えてしまう不思議さを持っています。

和紙の和は、大和(日本)の和、人の心の和、漉くまでの工程に携わる人達の心の和、といつも先生は仰云います。

白石和紙の真隨をこゝに見ます。

(修善寺町柏久保『やまんば』経営)



修善寺紙と私

木村みま

昭和六十年十二月の町報に、「修善寺紙再現のロマンを追いもとめてみませんか」との会員募集の言葉にひかれて入会しました。

私の幼かった大正の頃狩野路の入口立野はまだ宿場の面影を残した街道すじの村でした。豆腐屋、作り駄菓子屋、車鍛冶屋、そんな町筋の中に居酒屋の店が花やいだ町を思わせておりました。南向の通りに板戸に張った立野紙の干してあるのが幼い日の記憶の一コマにのこっております。

家の屋敷つぎの大見川添いにこうぞ、三又が作られておりました。秋が深まると紙と交換で切り取られてゆきました。多分居間とか台所の障子紙だったと思います。

全く文献にみる様な柿色の色よし紙として権力者の好んで作ったものでも、本能寺に消えた、森

蘭丸の高々と結い上げた髻も色よし紙であったとか、そんなものとは程遠い素朴そのものの部厚い紙だったと記憶しております。当の修善寺紙、色よし紙として珍重されたのは桂川の上流、紙谷の里三須家(文左衛門)が総元締となり里人に漉かせていたもので平家物語、東鑑、等にも載せられているとのこと。

紙すくや紅葉ちりこむ瀬のひびき

こうして珍重された修善寺紙ですが古今和紙譜に「平家物語」鎌倉初期に其の名稱が記載されているが之は小宝旨紙阪東豆州紙名也、色薄紅也とあって一種の特色ある紙として記されている。徳川幕府の慶長年間に盛んに製造され八方紙と稱し科紙として製造元であった。同地三須文左衛門は慶長三年三月四日附徳川家から賜った「於豆州鳥子草、がんび、みつまた、何方候修善寺文左衛門より外には不可伐殊火を付紙草焼捨候者其中可為曲事候」この様な徳川の取締りの中で生きつゞけ明治四十年頃までは実存していたとのこと。其の後は立野半紙として村人たちの実用向の障子紙などに変って行ったものと思います。夢を求めて復元の会の一員となり紙谷の里へ。三須家へは大変御約介になり早三年余り勉強させていたゞいております。其の間山へこうぞをがんばりをとりに行き、こうぞのある所へは頂きに

行き、三須家の皆様元当主様には普々ならぬ御力をいただき畑にはこうぞう、三ッ又、「とろ、あおい」を作られ、仕事場は養鶏場の後。道具も近隣知人から寄せ集め会長はじめ男の方達は薪作り、きぬた作りと頭の下る思いです。高価な漉き道具だけは立派なものを作らせていただいております。紙漉になくはならないと云う水も山の滴水の池自然の中での勉強はすばらしいものです。

元来は米も取れない山里の産業として、とろ、あおいのねばりの強い冬の仕事で寒ければ寒い程ねばり強いつや、かな良い紙が漉けると云はれます。

材料をたばね、大釜に入れ大樽をふせて蒸し皮をむき、川に晒し、表皮を取り、灰汁処理をしさらに晒し、ごみ取りをし、さらに煮だし水にしたしたものを砧でたゝき、すっかり繊維のきれた所でとろ、あおいを入れて漉くと云う大変な作業です。二十人以上ではじめた会員も十人たらずとなりましたが作り出すこと。元点にもどること。そればかりでなくなんとも云へない感触と筆ざわりの心持よさに魅せられ続けさせていただいております。

はじめの希望は自分の手で漉いた紙でかな文字の勉強をして源氏四十八帖を書きたいの思いで

私たちと法律③

憲法は、平穏な生活をする権利も保障しています。

石田恭子

(ある日の夕食後のひととき…)

妻 お父さん、衆議院の予算委員会で三宅島のことが問題になっていたわよ。

夫 どんなことだったの。

妻 国が三宅島にね、ミッドウエー(米軍艦載機)の夜間発着訓練飛行場(米軍基地)の建設を計画しているみたいなの。

夫 それで……？

妻 野党議員は、建設の撤回を求めているんだけど、その理由として住民の三分の二くらいの人々が基地の建設に反対していること。それから必要とされる基地の面積の大部分の土地が住民の所有地であること等を挙げてね。

夫 それほど住民が反対しているのなら、民主主義という観点からみても国は、基地の建設はできないんじゃないの。

妻 それが、民主主義ということについて何にも答えてはいないのよ。要するに、厚木基地からの距離や、気象条件等が適している土地だ、という

こと。それに、日米安保体制が日本の安全に大きく寄与しているのも事実、ということのようね。

夫 じゃあ、あくまでも反対したらどうなるの。

妻 国から土地を強制的に収用されるでしょ。

夫 そんなに簡単に個人の土地を収用できるの。

妻 そうね。憲法は二十九条で財産権を保障しているけれど、公共の福祉で制約されることもあるのだし、それを具体化したものとして土地収用法があるわね。そしてそこでは、公共の利益となる事業の為なら収用できるという内容の規定があるわよ。

夫 ただ、とりあげられるだけなの。

妻、そんなことないわ。法律に基づいた手続に従ってまた正当な価額の補償が受けられるはずね。

夫 ふーん。それで三宅島の人たちは、納得できるのかなー。

妻 そうね。経済的な面からは一応、保障されるわけでしょうけど、基地ができてミッドウエーなどが来たりすれば、今まで通り沿岸での漁業もできなくなるだろうし。それに、公共の事業の必要性を謳うことで、住民たちの今まで通りの平穏な生活が脅かされるとしたら、憲法で個人の尊厳を守るためにさまざまな人権を保障していることが無意味になるんじゃないかしら。

夫 それに基地の建設は将来にわたって重大な影

響を及ぼすことだから、国はもっと時間をかけて住民に論議の場を与えなければいけないね。それが住民自治でしょ。もちろん情報も公開して。そして基地建設の問題は、たまたま三宅島に起こったけれど、いつ私達が住んで入る街で同じようなことが起るとも限らないし。この問題はつきつめていくといういろいろな問題を含んでいるね。

妻 そう、第一に日米安保体制と憲法九条の平和主義との関係。第二に国の基本政策と住民の意思とが不一致の場合の優劣関係と民主主義。

夫 これらのことは、何も基地の建設だけに限らないね。原子力発電所の設置にも同じことが言えるよ。結局、民主主義とは何かということから考えると、自ら答えがでてくるのではないかな。

妻 民主主義ー。民意ね。つまり住民の意思を反映した政治が為されるということでしょ。

夫 そうだね。最終的には論議を尽くしたうえで住民投票に委ねるべきではないのだろうか。その結果、住民の意思が賛成多数ということであればもうそれは、やむをえないことでしょ。唯そうあっていいのか、住民は日々、政治に関心を持って自分の権利を守らないとね。それは、民主主義社会の一員としての私達の責務ともいえるね。お互い忙しいけれど家庭の中でもいろいろ話しあって合意したところでやっていきましょう!!。

いい場所見つけた



第四回がいい場所見つけたは、「国指定

史跡、歴史民俗資料館」のご案内です。

県道16号修善寺伊東線上白岩バス停から

修善寺側に徒歩一分の場所です。

「上白岩遺跡」は、縄文時代中、後期の複

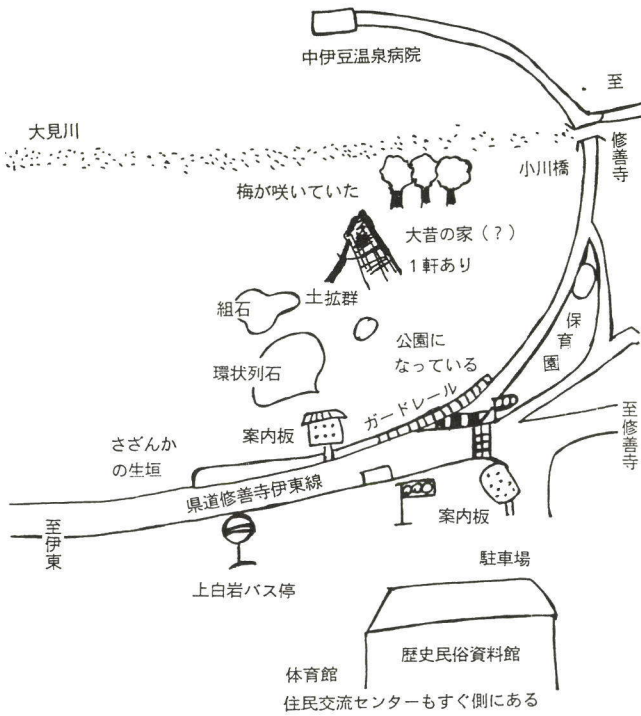
合遺跡でなんでも、全国的にもめずらしい

環状列石遺構という。山岳信仰のおまつり

広場や大規模なお墓の集まりであるという

説があつて意味は完全には分かっていない

んだと。公園になつてるのでピクニックな



中伊豆町 国史定史跡
上白岩遺跡 歴史民俗史料館

んかグー。

更に修善寺寄りに三〇〇m位歩くと「歴史民俗資料館」があるのだ。入館料は大人二百円、小人百円。中伊豆町の歴史や江戸時代頃から現在も使われている農具、消防団のハッピ等々諸々たくさん展示してありやした。

伊豆箱根鉄道 — 修善寺駅より —

東海バス—伊東行

伊豆箱根バス—中伊豆方面行

(上白岩バス下車 徒歩1分)

☆…お願い…☆

相変わらずの『西洋やまんば』のドジ南が、取材に行きます。一緒に行きませんか……。いい場所談義したいよね。編集部の子子迄お使い下さいませ。

北 南子…☆

「奥様、ご感想を」

小野 登志子



俊子は、数葉の写真を、一度胸の前で包むように持ち、それからおもむろに一枚また一枚とテーブルに並べていった。まるでカードで手品でも始めるかのような勿体ぶった仕草だったので、テーブルを囲んだ神妙な面持ちの妊婦たちは、何が始まるのかと、つり込まれるように写真に見入った。

一瞬、うっと息を飲み、時が止った。

「なあに?これ!。」

「うわあ——きもちわるい——。」

彼女達は、眉を寄せ、顔をしかめ、手で口を被い、明らかな不快感をこらえつつ、お互いに顔を見合わせた。

そら豆の型をした、鈍色に光るステンレス製の大きな膿盆の写真——それは、それだけでも見る者をギョッとさせる。

「これが、皆さんのおなかの中で、赤ちゃんを育ててくれている胎盤というものです。」

膿盆の中のもの、肉厚の花弁が重なりあった大輪の牡丹の花のようだった。それが白い半透明の羊膜に包まれてヌメヌメと光っており、中央部付近に付いている長い臍帯がよろりと側に置かれている。そして周囲には、鮮やかな血液の跡がある。

「いいですか。しっかり見て慣れましょうね。お産は、いろいろ見て、触れて、自分で納得することが一番大切なのです。」

とどめを刺すような俊子の口調に、はっと我に還ると、初めての妊婦たちは、写真を手にとりしげしげと眺め始めた。

鈴木助産院の院内母親教室の第一回目は、こうして始まる。妊娠期間も六ヶ月を過ぎると、ほぼ安定期に入り、そろそろ出産への準備にとりかからねばならない。

妊娠という現象は病気ではなく、生理的なものである。従って、お産をことさらに怖がる必要はない。だからと言ってなめてかかると、とんでもない危険を招くこともある。この危険を招くか招かないかの境目にあるのが妊娠中期である。迫り来る出産に対して、心身共により健康になるように、大いに努力していただきたいのである。

月二回の教室では、数人ずつのグループで、妊娠・栄養・分娩・授乳・育児等について、じっくりとカリキュラムをこなしていく。かつて、そう、かなり以前には、ある日、突然

外の方で、ものものしい音がしたかと思うと、けたたましく戸が叩かれ、雨を孕んだ熱い雲の塊のような、全く見知らぬ人達の一団が、重苦しい空気を玄関に運び込み、その中の、おなかを両手で抱えた婦人が、黄色くむくんだ顔を苦痛に歪ませ、髪を振り乱して、玄関の三和土にうずくまってしまおうと、そこからお産は始まった。そんなお産が多かった。お産はいつも、劇的に始まり、そしてつむじ風のように周囲の者をあたふたとさせた。

ところが、現代の女性は、実に豊かな知識を携えてやってくる。何しろ、とりどりの出産・育児情報誌も発刊されている位なのだから。

そういう方々に、一体何を話すというのか。もう、それ以上の知識を吹き込む必要はない。そう、その持てる豊かな知識を、身体で生かせるように指導することが大切なのだ。使いこなせない知識は、お産に対して、必要以上に恐怖を抱かせたり、あるいは軽視させたりすることにもなりかねない。お産を、自分のものとさせる為に、納得させる何か、が必要なのだ。

F君は、いつでも顎を前に突き出して、ソファに座っていた。ニコリともせず、妻の定期検診の終るのをじっと待っている。奥さんのMさんは一昨年大学を卒業したばかりの、明るくこだわらない利発な女性だった。お産というものを、夫婦の共通体験にしたいと、心に描いていたので、初回の診察から、F君と連れ立ってやってきた。だが、F君としては、妻の演出するニューファミリーには同調するから一緒に来たものの、全く、ここ

に居ることは、男として耐えがたいことだ、とても思っているのだろうか、害虫を噛み潰したような表情に、その苦渋が感じられた。

「御主人、氣むずかしそうな方ね?」

と、俊子が言うと、

「そうなの。私、拝み倒して婿養子に来てもらったの。」

と、Mさんは笑いながら片目をつむった。

寒い夏から、油照りの九月に入った。妊婦たちは、七、八月に二人分の体力を消耗してしまおうので、秋は最も苦しい時期となる。マタニティドレスのすっきり板についたMさんと、F君は、ひき続き一緒に定期検診に訪れていた。ドップラーを通して胎児とまみえることもあり、又、慣れたこともあってか、F君の態度もずつとやわらかくなっていた。そしてMさんの母親教室の順番が来た。言うまでもなく、御主人のF君も参加したのだ。

胎児は、絨毛膜や胎盤を通して、母体から栄養と酸素をもらって成長する。ついでに言うと、アルコールやニコチンもいただく。これは困ることだがこのたびは論外とする。大切なのは、栄養がいくら供給されても、酸素が少なければ、栄養を働かせることはできないということ。酸素は、肺の中に吸い込まれた空気が肺胞に入ると、肺胞の周囲を取り囲んでいる毛細血管の血液の中のヘモグロビンに取り込まれる。この赤血球の主成分であるヘモグロビンが少ない状態だったら、取り込まれる酸素の量は少なくなってしまう。このヘモ

グロビンの少ない状態を貧血という。つまり貧血ということとは、胎児が酸素欠乏の元に置かれているということである。貧血は、又、胎児の成長のみならず、母体や、直接分娩に対しても悪い影響を与える。妊婦は特に鉄欠乏性貧血になりやすい。それには鉄分の多く含まれた食品を摂ればよいが、妊娠中は通常の六倍位必要なのだ。貧血の怖しさを知ってもらわなければならない。貧血、貧血、血、血……そうだ!あれだ。胎盤だ。胎盤の写真だ。

「よく見て下さいね。」

と、俊子は写真を指さす。

「この、スポンジのような胎盤は、たくさんの血液を含んでいます。そして、この臍帯を通して血液は赤ちゃんに送られています。血液の中のヘモグロビンが酸素を運んでくれます。貧血の人はこのヘモグロビンが少ないのです。すると、赤ちゃんは酸素不足になってしまう。ほら、わかったでしょう?貧血がどんなによくないことか——。」

赤ちゃんの事を愛の結晶などと言い、お産を、とてもロマンチックなものと考えている人が居る。それもいいことだが、お産に対するある程度のイメージが描けていないと、突然おし寄せる陣痛の痛さに耐えられなくなる。お産に対するイメージ、それは文字で教えられるものではない、もっと重々しく、おどろおどろしく、心に、否、子宮にずーんと反応するようなものではない。

胎盤の写真を見せられて、お産が一步自分に近づいてきたと、感じたものか、どうか、妊婦たちは、真剣な表情を見せ始めた。

F君は拒否するかと思いきや、喰い入るように写真を見ていた。そこに、まるで生命があるかのように。否、生命を育んだ物に対して、畏敬の念を込めて眺めていたのかも知れない。この時からである。F君が、何でも質問をするようになり、うちとけてきたのは。

母親教室では、ラマーズテープを使って、お産のリハサルを何度も行う。これは、やらないよりやった方がずっとよい。分娩の進展具合は、個人差が大きいので、テープと全く同じに進行するとは限らないが、産婦には、次に何が起こるかか予めわかるので、不安が消え、さわぐというような事がなくなってきた。Mさんは、このラマーズテープをダビングして、毎日、自宅でリハサルを行っていたという。

愈々、Mさんの出産の日がやってきた。

一月〇〇日。五時半に血性帯下。生理痛様の下腹部痛有り。九時半、診察、本日には生まれなことの事、帰宅。十三時、不規則陣痛開始。二十時二十五分、破水。五分間隔、二十秒の陣縮。二十時二十分、入院。

玄関先の庭の方で何やら声がある。しかし、お産に駆けつけた人々独特の重苦しい話し声とは、ちょっと違う。笑い声さえ漏れてくる。何事かと俊子が背伸びして見ると、F君が、ビデオカメラを肩に、助産院の看板やら、庭やら、建物を、ジーンと撮している。そしてMさんが車から降りるところ

を撮ると、そのまま後姿を追いかけて、Mさんが玄関に入り、振り向いて手を上げたところで止った。

—— 劇映画でもつくるつもりなのかしら。生まれたばかりの赤ちゃんをビデオに収録する人は、かなりいるけれど、生まれる前の玄関先から撮すとはね——と、俊子はいささか呆気にとられた。

それからF君は、十メートルあるかないかの廊下を撮すと、入院室に入り、分娩着に着替えたMさんに、ハイ、ポーズ! などと言った。もう破水して五分間隔の陣痛が次から次へと押しよせて来ているというのに、Mさんは、にっこり笑ってベッドの上に腰をかけた。その右手には、もうVサインが出ているのだった。

およそ二時間、Mさんは、陣痛の波長に合わせて、呼吸法と補助マッサージを組み合わせた、いわゆるラマーズ式分娩法で、つらくて長い分娩第一期を乗り切った。F君は、側で奥さんを励まし続けたかというところでもなく、かと言ってオロオロするわけでもなく、只、ひたすらビデオカメラの調子を確かめ、レンズを磨いていた。夫婦というもののここが解らないところだが、Mさんは陣痛が起こってくると、何やら笑いながらF君に話しかけ、彼の御機嫌をとったりしていた。

二十三時五十分、分娩室入室。

冬の分娩室はカッと熱くしてある。もあっとした湯気は、そこに居る者の身も心も安らげてくれる。だが、刻々と迫る生命を産み出す時に備えて、分娩室には、微笑みと緊張感が次第に漲ってゆく。



へそのおを切った時に……。

あっちにうろうろ、こっちをうろうろ。「そんなに動き廻ると仕事の邪魔ですよ。少し静かにして下さい。」

と、能子先生に何度も吐られながら、しかしF君は、分娩室内をビデオカメラでとりまくった。生れ出たベビイは言うに及ばず、その母の玉の汗も、介助する人々の一挙一動を、壁の時計も、窓の水筒も、そして分娩室の床までも、舐めるようにして撮っていた。

だが、何と、F君、今度はマイクに向かってしゃべり始めたのだ。

「えー、こちらは分娩室です。生まれました。只今、生まれました。平成元年、一月〇〇日、一時三十二分、初春のしじまを破って、めでたくF家に長男が誕生致しました。三三〇〇グラムの元気な男児です。聞こえますか? 今、産ぶ湯に入って、盛んに、産ぶ声をあげています。——では、このあたりで、無事、お産を終えた奥さんに、一言お伺いしましょう。」

と、F君は、産後の安堵感に浸っているMさんの顔にマイクを近付けた。

「奥様、只今の御感想をどうぞ。」

分娩室を挟んで向う側の新生児室で、産ぶ湯をつかっていた能子と、こちら側の診察室でカルテ

に分娩の状況を記録していた俊子は、偶然にもお互いに首を伸ばし合い、あぐりと口を開けて顔を見合わせた。ところが、Mさん、にっこり笑うと言ったのけた。

「はい、(ラマーズテープの)ビデオと同んなじでした。」

感想を聞く方もだけど、聞かれれば、大抵は、感激でいっぱいですが、とか答えるものなのに、と、俊子は胸の裡でつぶやく。情緒というものの質が変わってきているのかしら……。

そんな思いも一向におかまもなく、F君は滔滔と続けてくれた。

「陣痛が始ってから十二時間余り、本当に御苦労さまでした。私も、生まれたばかりの赤ん坊を目の前にした時、まだ、とても、我が子という実感は湧きませんでした。小さな、赤いものが動いているな、と思ったくらいでした。……しかし、先き程、へそのお・を切らしてもらった時に、ふと、おかあさん、ありがとう……と。さあ、こんどは、おとうさんの番だよ。必ず、お前を丈夫に育てるからな、と、自分の身体の中に、思わず、何か、新しい力が湧いてきたような気がしました。」

新しい時代の、新しい人たちがここにいる。俊子は、明るく大きなものに出くわしたような気がした。そして、それに心から拍手を贈りたくなった。

「あゝ、忘れてました。」

F君はあたふたとマイクをカメラに持ちかえた。「胎盤の写真をとらなくては。胎盤の。あー、胎盤はどこにありますか?」

※ 写真は本文とはありません。

学ぶということ

④

滝 義明

小学校の二年生になると、あの「九九」が出てきます。ぼくの所へ来ている中学生が「あれがうまくいえなくて、廊下に立たされて泣いたっけ」などと切ない思

い出を語ってくれたのですが、まさにこの時期、子どもたちは「九九」のあらしにさらされます。

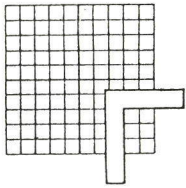
まだ、現在の学校（および家庭）では、九九は、魔法の呪文のように、呪えることができれば算数ができるようになるという迷信が多数を占め、この時期の子どもたちの主要な評価基準にされてしまったりします。

かけ算は、一般的にはたし算でしか得られない集合の和を、ある条件の揃ったものにおいて一挙に得ることのできる手段です。例えば、一皿あたりのりんごの個数が一定である時に限り、「一皿あたりの個数」×「皿の数」、として全体の個数を得ることができるとはなりません。また、「一皿あたりの個数」と「皿の数」という、異なった単位のかけ合わせにより、「全体の個数」という新しい

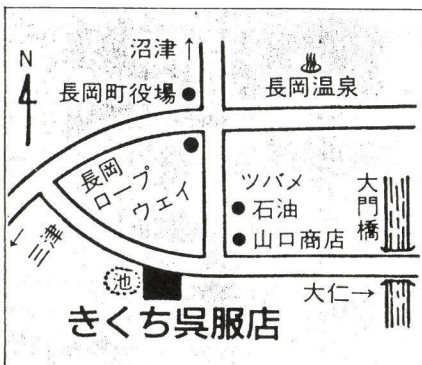
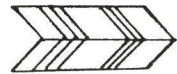
単位をつくり出すという側面があり、これらの理解が、子どもたちが先に学んでいく面積・速度といった概念の基礎になるものです。故・遠山啓さんをはじめとした数学教育協議会は暗記の強制を避け、かけ算の意味を理解させる上で、九九の指導の際に図のような道具を併用することを提案しています。この図は、 2×3 の場合を示しています。

現状、九九をマスターしたはずの子どもたちの多くは、例えば 7×6 に比べて 7×9 がどれくらい大きいのかという感覚に欠けていて、九九が無意味な条件反射にしかなくなっていないように思うのです。

たとえ結果的にはあっても、意味不明の行為の強制は、それを「マスター」できる子どもたちにとっては思考の停止をうみ出し、できない子どもにとっては劣等感をうみ出し、いずれにしても学習に対する嫌悪感しか残さないのである。



遠山啓「数学の学び方」岩波新書



愛情ある対話でお役に立つ

きくち呉服店

伊豆長岡町小坂 2 6 8 - 2
☎ 05594 (8) 2643(代)



おたより ありがとうございます
ごさいました *



2号、読ませてもらいました。

保健婦という私達の仕事は、人の一生を一日のうちに見てしまう仕事です。テーマは「健康」「保健」かもしれませんが、人間そのものです。常に相対する人間がいます。すると必ずから、そこに自分が写し出されます。問われ続けます。

そこで、私は悶々とするわけです。

世の中のとやっていることと、私が一人を相手に話す内容の矛盾に憤りを感じるのです。例えば、子供にお菓子はなるべく少なく、良い物を選んでと言っても、世の中は、子供がほしくなるようなCMを流し、その物の中味も、子供の体を何も気づかしていないものばかり、ということを考えて、私に何ができるかと、思うのです。でもき

と何かできる。

下の子供が一才になって、私は今のままじゃないかと、思い始めているの。

何か、自分の生きる方向を決めなければと。

私が気づき始めている何かの正体を、つかんで、それを越えていきたいと。

自分が自分であるためのもの、これを見つけた。それは、私にとって、母親という立場かもしれない、保健婦という仕事かもしれない……でも、いまは、もっと別のものかもしれないと思う。それによって母親も保健婦ももっと大きく思われるような。この本もそういう意味で、私に刺激です。月並だけど「がんばっている人達がいる」という……。

上の子が一才の頃は、仕事をやめたくて仕方なかった……悩みぬいて、それを整理して、今は続けられる自信を持てるようになってます。ただ、これは、今現在の話。私の生活は、縄渡りで、どこかがおかしくなれば、バランスを失うぎりぎりの所で、毎日、仕事へ行っている状態です。

いつでもやめられる責任と勇気を持ちながらの出勤！のつもり。

「草の指環」の感想ではないけどお話ししたくなつて書いてみました。次号を楽しみにしています。

浅賀勢津子（土肥町）



はじめまして。

私は今、子育ての真最中で、毎日の生活に追われていますが「草の指環」を読んで、ハッと我に返ったような気持ちになりました。忙しさにまぎれて何が一番大切なことなのかを見失ったまま走っていたような気がします。特に第3号の「今、教育をあなたと」を読みとても共感しました。子育て本に当たり前の感じが、特にほめ方、しかり方、は大事なことだと思いますが、子供の気持ちになってやって共感するってことが大切なんですね。すると自然に言葉がでてくると……。今までガチガチに考えてましたが肩の力が抜けたようなホッとしたような、元気づけられました。

私の家は琵琶湖のすぐそばで琵琶湖なしでは生活できないような所です。今その琵琶湖が開発や汚染で死にかけています。私達にできることはまずこれ以上琵琶湖を汚さないことです。下水道も完備されていないので個々の家もつと気をつけるべきこともあると思うのですが、一時に比べる「粉せっけんをせおう」という運動も盛り上がりません。

私は「草の指環」を読んでいると、とても元気がでます。学生にもどったような。もう一度いろんなことを勉強したくなります。みなさんがとても真面目に問題にとりくんでおられるから私も素直な気持ちになれます。

田中雅枝（滋賀県）

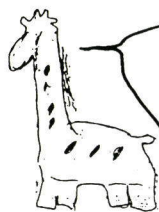


音楽ファンを
魅了する。

ジョン・レノン
から
ボン・ジョヴィ
まで

CDハウス フォルテ

三島市一番町10-10 ◆年中無休◆営業時間
TEL(72)-6337 AM7:30~PM9:00



当店が推薦する
作品です。

- やがて春
- ナタリーの朝
- クロコダイルダンディ2
- 木村家の人々
- 放射能そこが知りたい
- 原発そこが知りたい
- 火垂るの墓
- バイス・バーサ
- ビバリー・ヒルズバム
- 赤ちゃんはトップレディがお好き

大仁店AM9:00~PM11:00
大仁町大仁444
TEL(76)-4863



伊豆長岡店AM11:00~PM10:00
伊豆長岡町古奈429-3
TEL(47)-1315

学力のアップはやはりマンツーマン指導ですね。

大仁家庭教師センター

●対象/小・中・高生 ●科目/英・数・国・社・理
やる気ある生徒、情熱ある教師を募集しています。

橘 堂 書 店

大仁町大仁 TEL(76)-4863 AM9:00~PM11:00

「草の指環」4号

発行日 1989年5月25日
発行所 草の指環編集部
スタッフ 山口八千代 小野登志子
石田 恭子 永田 恵子
磯部 信子
編集・責任者 平井 和子
連絡先 0558(72)-6728(平井)
(76)-2998(磯部)
振込先 東京0-352089「草の指環」
印刷 いさぶや印刷工業 ㈱

消費税が実施されました……。台所と直結して
いる政治あれこれについて皆で考えてみませんか？

草の指環編集部では
皆様のご意見をお待ちしています。

〒410-23

田方郡大仁町守木745-4

磯部 信子

0558-76-2998

♪楽しい人々 いらっしやいませ♪

電車・バスの待ち時間にも
お気軽にお立ち寄りくださいませ。

「草の指環」編集部 すいせん!!

△ベビー
△チャイルド
△ミセス
△マタニティ
△ファンシー

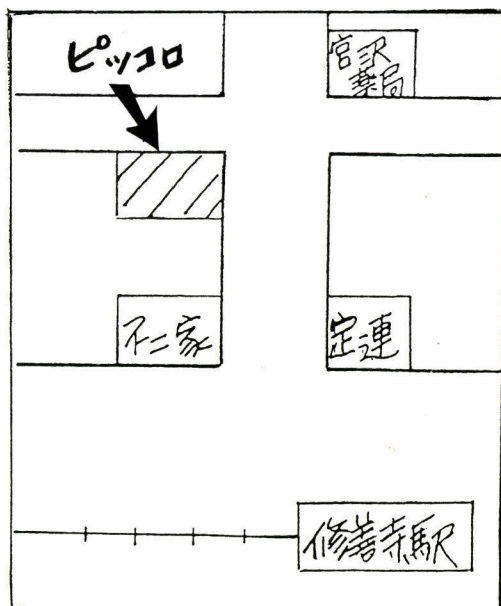


♪♪ ディスカウント ネイションショップ

= バ・ル - ル =

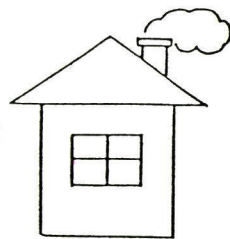
当店では カタログショップ° バルールの
のカタログを約2ヶ月おきに 出しています。
衣類はもちろん 家具・収納庫、小物等
バラエティ豊かな 商品を取り扱っております。
手配書、発送も 受け付けております。

カタログを 御希望の方は
お気軽に お電話ください。
良いもの 発見し 御利用ください。



修善寺駅前 ☎0558-72-6789

ベビーチャイルドショップ **ピッコロ**



あそびとくらしをクリエイト … 星谷 アミューズメント

☆ 「草の指環」は以下の書店で手に入ります。

- (御殿場) 加藤書店
- (沼津・三島) タチバナ書店 文盛堂書店 マルサン書店 ランケイ社
- (田方) 橋堂書店 中央書店 戸田書店 長倉書店 長屋書店 日盛堂書店
ブックスにらやま 水口書店 さくらや書店 修善寺駅前セブンイレブン
- (西伊豆) シオザキ書店 渡辺書店
- (伊東) アミー書房

¥400 1989年5月25日発行
「草の指環」編集部